

特 212

41

研究 郷土

横浪三里

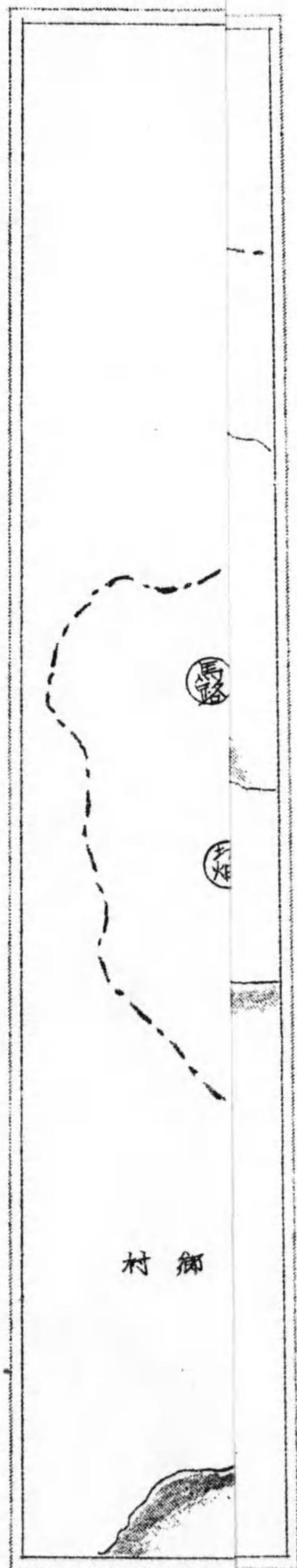
横浪尋常高等小学校



始

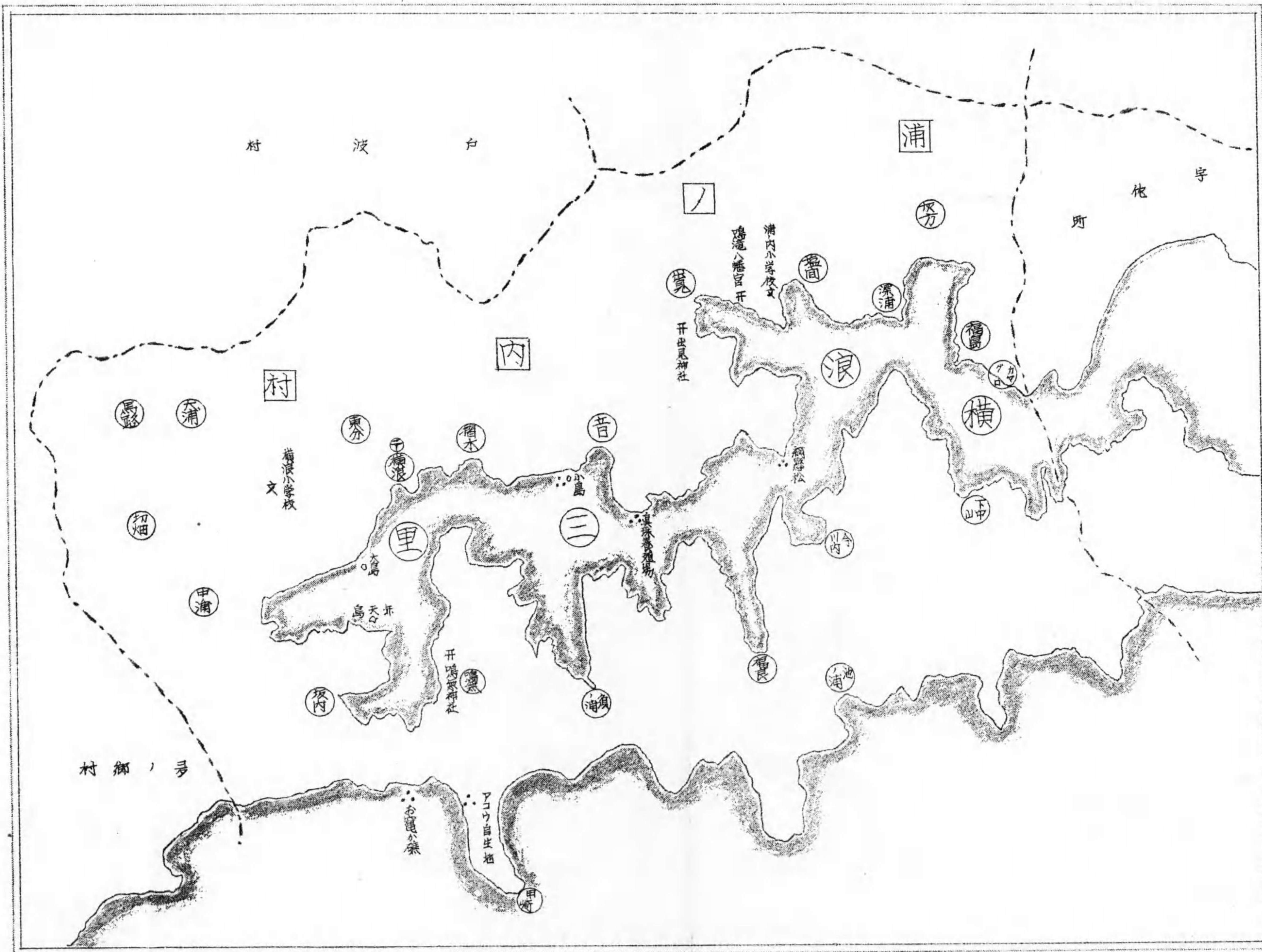


特212  
41



村 郷







## 結 言

本村は風光明媚の横浪三里を控へ縣下の名勝として其の名を知らるゝのみならず、地理的にも丁史的にも料又博物学的にも数々の特異性を有して居るが未だこれを集録したる郷土誌のありを聞かない。

完全なる郷土誌の編纂、それは村を愛し本村を知らんとする何人もが常に冀求して居る所である。然し乍ら此の事たるは實に難事の中の難事である。

殊に浅学菲才の我々が繁忙なる教職の傍らこれに當らんとしても到底その完璧を期し難いのは當然である。それにも拘らず敢て之を編纂にとりかゝつた所以のものは今年本校が迎えた創立



五十周年の記念事業として極めて相応しいものであるのと守一つは出来上つたものそれが如何に貧弱であらうとも將來これが完全なる郷土誌刊行の端緒ともなり本村発展の上に少しなりとも寄與する事が出来るならば望外の幸であると考へた故である。

この水が編纂の計畫を樹てたのは本年五六月の頃であつたが偶々支那事變に際会し学校としても事變関係で色々忙しかつた為め職員に異動があつた事などて最初の計畫通り運ばなかつたのは

遺憾である。

本誌は大別してこれを地理的部門と丁史的部門と博物学的部門との三部門とする。地理的部門は植田素訓導が丁史的部門は不肖な博物学的部門は辻保二郎訓導が主として其の任に當つたのである。本誌は其の體裁より見ても又其の内容よりしても普通世間にある郷土誌とは趣を異にしてゐる。これを村誌と謂はんよりも寧ろ郷土の所産とでも云つた方が適當であらう。

本書編纂に當りては丁史的方面では寺石正路先生、山本淳先生、博物方面では吉永虎馬先生、蒲泉檢治先生、地理的方面では平田茂留先生、井上寛六郎先生等の諸大家より直接同接の御指導御教示に預り且つ森田貞実氏、矢野春太郎氏其他村内有志諸賢、学校同僚、職員諸氏より多大の御援助を蒙りたる事を茲に厚く感謝する。

昭和十二年十一月三日 明 沼 佳 節 記

高岡郡横浪尋常高等小学校長  
長 崎 刃 馬

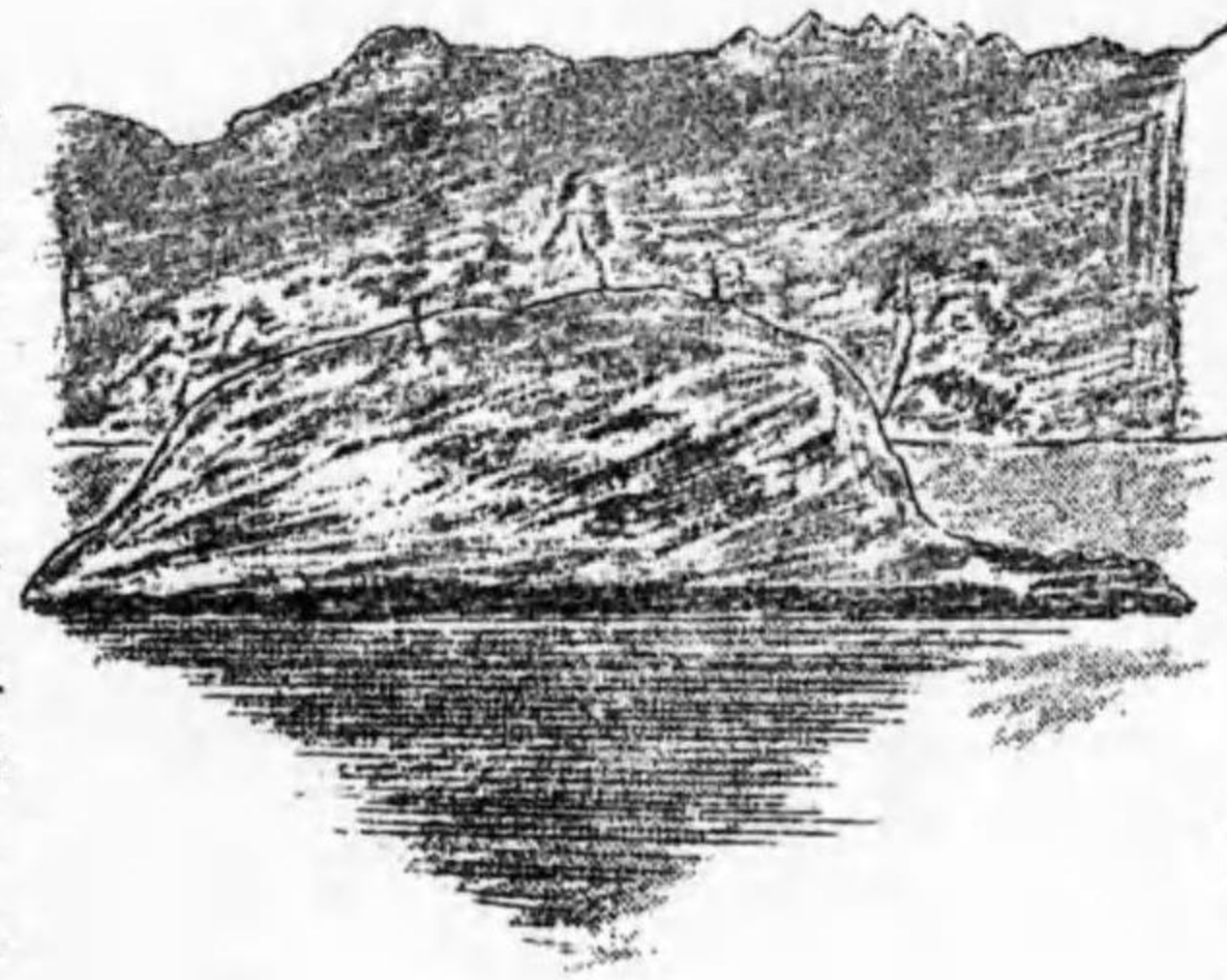
# 目 次

第一章	横浪三里の史蹟	1
第一節	鳥無神社	2
一	所在地	2
二	御祭神	2
三	御社格	2
四	御由緒	7
五	お船遊	11
六	御祭祀	14
七	土佐大神の神興狼害の事	15
八	御建築	19
九	御棟札	21
一〇	御宝物	27
二	山内忠義公の御参詣	39
二	出見神社元花山天皇に因する傳説	39
一	王川家所蔵記録による口碑	40
二	御届書	43
三	其他の文獻	43

第九節	土佐灣及浦戸、浦ノ内、須崎灣の成因	108
第八節	浦ノ内灣の沈降海岸（瀕谷）景	106
第七節	郷土に於ける現世層について	106
第六節	郷土を占むる安藝川層	102
第五節	土佐灣の海岸形	102
第四節	郷土地方に連繫をもつ諸山脈の走行と其の概観	96
第三節	土佐灣陥没と各山地形	92
第二節	土佐の地質及地形	90
第一節	郷土の位置及概畧	89
第三章	横浪の地質及地形の概観	89
第八節	横浪三里附近の動物	87
第七節	本村の名木	86
第六節	本村産有用植物に就いての概畧	84
第五節	学向上の特種な植物に就いて	82
三	鳴無神社境内山地及舟越山北面山麓のもの	79
二	外海及内海に於て發見するもの	77

第一節	地質概要	69
第二節	気候	69
第三節	本村の植物区系	70
第四節	横浪の植物目録	71
一	外海に於て發見せられるもの	71
二	所見	60
三	中島鹿吉氏所説	61
第二章	横浪の植物景観及動物	69
一	御肇國史	55
二	神武天皇御東征土佐御通過説	54
三	編	52
四	佐伯杏山所藏古文書寫	51
一	書	50
7	土佐國編年記事畧	48
6	葦川筆話	48
5	土佐國洲岳志	47
4	土陽視廳記	47
3	南路志	44
2	土陽誌附録	44
1	類聚土佐故事	43

第一章 横浪三里の史蹟



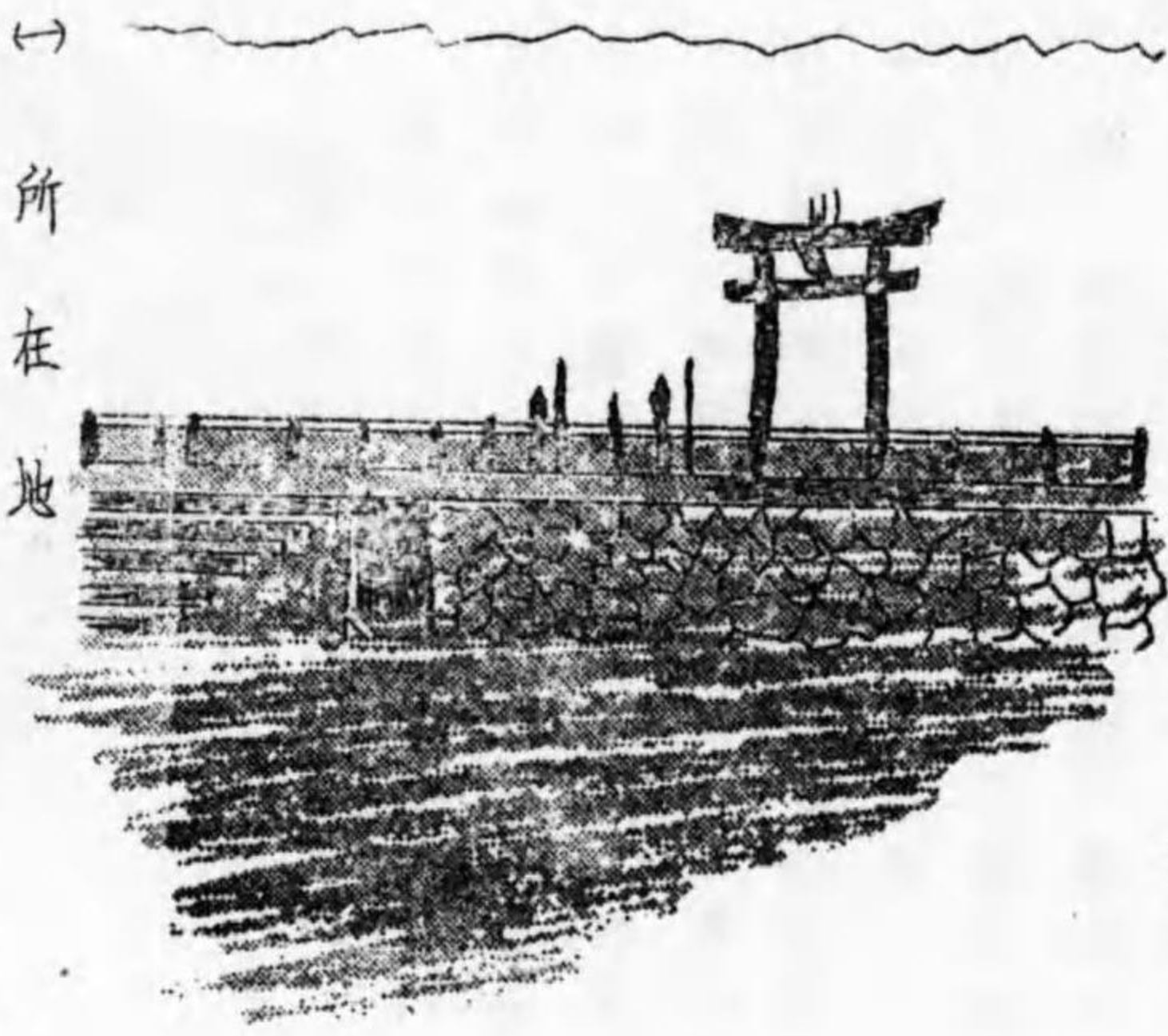
長 崎 丑 馬

横浪三里は宇佐港を以てその入口となし西方浦ノ内村に灣入する。長汀曲浦三里の入江なり。傳ふる所によれば白鳳の昔土佐一帯大地震あり大地五十万頃陥没して海となる。本郷の地も亦陥入して海となり。以てこの入江をなすと。

入江の西岸山勢或は逼り或は轄け奇岩怪石各所に点綴し四季折々の眺め盡く事なし。此の地は風光絶佳なる上に江内波穩に真に天然の避難港たるを以て、かつて陸上交通の不便をりし往時においては多くの人のこゝに居住し、或は此の地を往來したりけん事敢て想像に難ならず。従つて此の入江を繞りて古来幾多の傳説道蹟す。

而してその史蹟中特に著名なるものは鴈無神社、出見神社并に花山天皇御道蹟地及神武天皇御東征土佐衛通過説の三となす。左にこれに就きてその大要を述べん。

第一節 鳴無神社



(一) 所在地

高岡郡浦ノ内村大字奥浦東介小字鳴無部落の玉島鎮座

(二) 御祭神

一言主大神(又の御名は味鋲高茂根神と申す大國主命の御子なり)

尚藤田風神、級長津茂命、級長津姫命を配祀す

(三) 御社格

郷社

(四) 御由緒

社傳旧記によればこの大神此の地に鎮座ましまししは令より千二百八十三年の昔にして、雄略天皇の四年十二月晦なり。

古事記及日本書紀を按ずれば雄略天皇の春二月葛城山に狩獵し給ふ。時に谷を隔てて、長人あり。その面貌容貌天皇に相似たり。即ちいかなる公ぞと問はせ給へば対へ曰さく、現人神を先うきみの諱を名のれと申さる。天皇答へ給はく、朕は是れ幼武尊なりと。長人次にそのりて曰さく、われは雖惡事一言。雖善事而一言。言離之神。葛城之一言主之大神なりと申し給へり。天皇大に畏みて御刀及御弓を始め百官等の着るる衣服を脱かしめて拜みて獻りさ。かれその一言主大神喜びてその捧物を受けたまひさとあり。即ち古事記及日本書紀の原文を記載すれば左の如し。

古事記

又一時天皇。登幸葛城山之時。百官人等。悉給着紅紐之青褶衣服。彼時有其自所向之山尾。登山上人。既尋天皇之函簿。亦其裝束之狀。及人衆相似不傾。爾天皇望令問曰。於茲後國除音亦無王。今誰人如此而行。即答曰之狀亦。知天皇之命。於是天皇。大愈而矢刺。百官人等。悉矢刺。爾其人等亦皆矢刺。故天皇亦問曰。然告其名。爾各告名而彈矢。於是答曰。吾先為名告。吾者。雖惡事而一言。雖善事而一言。言離之神。葛城之一言主之大神者也。天皇於是惶畏而白。恐我大神。有字都志意美者。不覺曰而。大御刀及吾矢始而。脫百官人等。所服之衣服以。拜獻。爾其一言主大神。手打受其捧物。故天皇之還幸時。其大神滿山未。於長谷山口送奉。故是一言主之大神者。彼時所願也。



四年春二月。天皇射獵於葛城山。忽見長人。未望丹谷。面貌容儀相似天皇。天皇知是神。猶  
 故問曰。何人公也。長人對曰。現人之神。先稱王。然後忘道。天皇答曰。朕是切武尊也。  
 長人泣稱曰。僕是一事主神也。遂與盤于遊田。馳逐一處。相辭。並轉馳。言詞恭恪。  
 有若逢仙。於是日曉田罷。神符送天皇。至未日水。是時百姓咸言。有德天皇也。

土佐國群書類從八十八上

名にし負ふ人の知らぬもことわりや浦の内なる鳴無の宮。正一位高賀茂大明神又鳴無大明神  
 とも唱へ奉る云々

中 畧

往古大長谷若建尊天皇四年庚子春二月甲子朔八日天皇葛城山向榎の上に獵し玉ふ（以下古事記  
 に全じ）

中 畧

天皇田母に詔して此神を又葛城山の麓にむかへ鎮め奉る。其和魂は猶土佐國にとりまじ  
 て祭礼怠る事なし云々。

かくて此の大神松に來りて海に泛ぶ土佐國高岡郡浦ノ内村の南半島部に御上陸遊ばさる。御  
 此の大神何故に此の地に御上陸ありしみにつきては種々の傳説ありて定かならず。

或は曰く天皇葛城山に狩し給ふ時此の神の魂れたまひて天皇と其の装ひを同じくし且つ狩獵  
 を争ふを見ていたく怒らせ給ひ遂に此の神を縛して土佐に流さ水給ふと。然れどもこは信じ

難き事なり。何とせば古事記及日本書紀を見るに天皇は葛城山に此の神を見て初めは怒ら  
 せ給ひ百官に命じて矢を番はしめられしも其の一言主大神たる事を知らるゝや大に敬ぶ畏れ  
 て百官の矛矢、大刀をばじめ衣服に坐るまで之を脱みしめて此の大神に獻じ以て尊敬の御意  
 を表はし給へり。この事より見て御島流も云々の説は誤傳にして信するに足らず。

思ふに此の大神は大國主命の御子にして下照比賣の御兄君に當らせ給ふ味祖高我根命を水出  
 要系の御神に座す事明なり。

出要系の御神が我が土佐に降り未座せる事はいと顯著なる事実にして今日各地に其の御祭神  
 の奉祀さ水ある点より見るも此の大神が此の地に降り奉りませる事も敢て過然の御事にもあら  
 ざるべし。

尤も此の御神は神代の神なるに拘らず雄略天皇の御代に現れ給ふまじ年代より見てあり得べ  
 き事に非ずと思惟する向もあらんも凡そ神の御事は淺薄なる人智を以て計り難きものあり。

神は所謂神にして神愛不思議の靈驗奇蹟を現はし給ふこと敢て怪むに足らず。  
 神代の神が後の世に其の現身を顯はし給ふ事他に其の例跡をならず。さればかゝる神事をと  
 かく論ふ事なく傳説は傳説として傳へ置くこと賢き業なれ。尚一説に此の大神の此の地御上  
 陸につきて次り如き傳へあり。即ち此の大神の御上陸は此の大神を齋ま奉る祝部がその靈聖  
 を奉じて此の地に上陸したるものなりと。こは或は然あるべしと首肯せらるゝ節あるもこゝ  
 には唯傳説の一つとして記し置く事とせん。

さて此の御神の御上陸ありし所は浦ノ内村の南半島部にして今神崎と稱する所なるが、折  
 から本村鳴無部落の里人共見慣れざる煙の山の被方に立ち騰るによりて何事ぞらんと怪み十  
 四五人誘ひ合ひて往きて見るに神なり。海水を煮きて食物を調理し以て火食せらる。即ち尊

ぶ敬みて之を玉島に迎ふ。

この時この神の火食せられ遺跡としてお籠ヶ磯と称するお籠型の磯今に存す。而して此の神の榮られし御船は金剛丸と称せし故里人は此の御船を昇ぎて山を越えしかば其の山を寺に舟越山と称す。

今舟越山の北麓田圃の中に横木の生ひ茂れる所あり。こはこの大神の一時休まられ給ひし所なりと。

さて此の御事は雄略天皇の四年十二月晦の事なりしに依りて出でし里人の中に此の御船に連綿飾をなす事なしと。かくてお迎に出でし十五人の若の子孫は代々社人として神事に奉仕することゝ承り。今その氏名を挙げれば次の如し。

神輿係 六人

志那赤祭社入頭

山 寄 福 馬 (前中)、 山 寄 義 秋、 山 寄 勝 利

秋祭社入頭

山 寄 常 馬 (後中)、 山 寄 徳 馬、 正 木 一 憲

槍持係 四人

山 寄 貞 義、 正 木 房 次、 山 寄 喜 三 郎、 植 村 壽 重

長柄今持係 一人

山 寄 石 之 助

孔雀持係 一人

山 寄 北 太 郎

神輿台持係 一人

正 木 一

外に膳廻二人之は十三軒中より選ぶ。

○印はお迎への時注連繩飾りをなし居たる家より。此等の若は今に注連繩飾りをなすも其他の若はこれをなさず。

尋で社殿を営み神を此處に奉安し御船(金剛丸)は社殿の右脇に封じ御船山と称し注連繩を張りて衆人の漫りに其の所を戯むを禁す。後神靈を尊崇して高賢者大明神といふ。尋で龍田國神、級長津夜命、級長津姫命を合祀す。但年月詳かならず。

本社祭神並跡の傳説此の如し。蓋し本邦上古天津神國津神の時々御船に乘りて天降り給ひし事屬々古史に散見する所を承りて此の大神が此の地に降り来りて居る事と敢て疑ふ余地を承るべし。

鳴無神社の御船遊

社傳旧記を案ずるに祭神御上陸の後二百余年を至て天武天皇白鳳十三年十月十四日當國大地震あり。大地五十万頃陥没して海となる。本郷の地も亦陥入して入海となり此の横浪三里をます。依て更に浦ノ内郷と称すと。之を以て之を見れば横浪三里の或因は白鳳の大地震の結果なるべきもその地震の際果して一時に現今の如き入江を生ぜしや或はその以前より已にかゝる入江のありしもの不此の地震の結果一層陥没せしものなるや當時の確なる記録を承りて是に知り難きも彼の鳴無大神を神寄よりこの玉島に迎へ奉りし事實より見る時は已に一條の入江を生じ居たるにあらざるや。

尚ほ白鳳大地震に陥没せる五十萬頃の地は黒田郡と称せし由なるがそ公果して何処なるか  
水亦定まらず。只今日の地層より考ふる時は本村以西に到る地にはあらざるかと推察せら  
る。

さてその後大神人に告げて曰く「吾久しく此地に留まる別所に分ち祭らん爲め宮殿を設け  
よ。」

此石の墜つる所は即ち吾れ遷り留る処なり。し  
と、大石を抛つ。其の石土佐郡一宮村に墜つ。

此の石礫石と称して今に土佐神社の東尾そ四十間にあり。高六尺周囲二丈五尺許なり。  
依て宮殿をその地に建て都佐坐大神と称す。是れ今日の國幣中社土佐神社なり。而して鳴無  
大神は後文保三年十一月正一位鳴無大神と称し奉る。

抑鳴無大神が別に一宮村に鎮座ましまして理由は神慮深遠語り知るべからざるも思ふに土佐  
の總鎮守として鎮りまさんには其の地形上より見ても一宮の地こそ御神慮にかなむる御事  
なるべく御神慮祭廟の上よりしてしかあるべく詳察せらる。

以上の事よりして土佐大神と鳴無大神とは全く同一の御祭神にましましてその御祭日の如きも  
全く左様なることは当然の事といふべし。

これより毎年祭日には土佐大神と浦ノ内に御神幸あり。鳴無神社と共に神輿を並べて三里の  
入江に於て御船遊あり。以て祭典の恒例とす。

土佐探古録載する所嘉祿二年古厨子裏書に曰く（書体解し難き所あり原文のまゝに記す）  
注進此御大明神御流末タル次第ノ事

合

其昔此所不知注御座一宮此御在所へ渡御座始事者、天平寶字三年己亥、見付名御船遊下申  
也。

其後四百三十五年成、建久五年甲子六月甲申、此相仁十秒ル此御在所へ（此知意味不明）  
恭講祭勅返畢、同八月十日戌、御資殿造工御神幸始奉無遊事也。

泰弘内越智真光意趣也、此年御船遊神使送川越智守准宗信口口、一宮御船遊御使船、共此  
御前付一宮、御神幸、此御神幸相遊事始長共也。

右の記事によれば此のお船遊は令より千意百七十八年前奈良朝時代淳仁天皇の天平寶字三年  
より行はれしものなる事明にて此のお船遊はその後全國にも名高き行事となりし事は藤原家  
隆朝臣の歌にても祭する事を得べし。

家隆は平安時代定家と並ぶ称せられし歌人なるがへ保元三年に生れ嘉祿三年八十歳にて歿す  
（新勅撰集に彼の歌として）

土佐の海に御船遊べて遊ぶらし  
都の空は雪解のどけき

といへるが有り。遂に京都より此のお船遊の状を想像して詠じたるものなるべく建久年前の  
歌なるべしと思はる。

かく此のお船遊は有名なるものなりしによりその祭典に奉仕する衆人の如きも世に名を知ら  
れたる名人にして京の都より時々下向したるものゝ如し或幾和述部用光といへる衆師京よ  
り下向し此のお船遊に樂を奏しその帰るゝ安藝の沖にて海賊に出逢ふに一命をとられんと

せし時今生の思ひ出に日頃吹きならしむる筆葉（まき）を取り出し精根を抽んじて吹きならせば海賊  
夫その妙技に感じ何れも前非を悔いてその罪を謝し剣へ淡路の鳴門まで送り届けし由十訓抄  
及古今著聞集等の書に見えたり。へ守鏡にも用光の事書かれたるも内容稍異なる所あり。  
十訓抄に曰く（十訓抄は昔より著者用光なり古末橋成季の著なりといふ。されどその出来  
は建長四年にて北條時頼の時代なりしは疑なし。）

和述部の用光といふ義人ありけり。土佐の御船遊に下りて上りけるに安藝國へ安藝郡の事  
なるべし）なにかしらの泊にて海賊押寄せたり。考夫の行方知らぬに防ぎ敷ふ力なくて合は  
衆なく殺されんかと思ひて筆葉を取り出し屋形の上にて居てあの驚々令はさなにおよばずと  
く何物をも取りたまへ。といひければ衆徒の者大いなる聲にて主達暫し待てかくいふ事を  
り。ものさけ。といひければ舟を押へて各語まりたるに用光令は限りと覚えければ涙を流  
して發てたき音をふき出で吹きすましたりけり。

折柄にや其のしらべ浪の上にて響き渡りて彼の海陽江のほとりに琵琶を聞きし昔語に異なり  
か。海賊静まりていふことなし。よくよく聞きて曲をばる程に、先の聲にていはく、君か  
船に心をかけて寄せたりつれどもこの曲の聲に涙落りてみだりぬとて漕ぎ去りたり。  
猛き武士の心を慰むる和歌には限らず、これら皆管絃の徳なり。この事は神の所感なら  
ねども命を助くる事嚴重によりてついでに記す云々。

古今著聞集第十九卷偷盜の一節  
筆葉師用光南海道に幾向の時海賊にあひけり。用光を毘に殺さんとする時、海賊に向ひて

いけく「我久く筆葉をもて朝に仕へ、世にゆるさぬなり。今いふかひなく、賊徒のため  
害されんとす。是宿業のしみりしむらなり。しげらくの命得させよ。一曲の雅聲を吹かん  
しといへば海賊ぬける太刀をみさへてふみせけり。用光最後のつとめと思ひて、なくく  
臨調子ついでに吹きにけり。  
その時をさけき群賊も感涙をなれて、用光を許してけり。剗淡路の鳴戸まで送りておろ  
しおきけり。諸道にたけぬるは、かくの如くの徳を必ずあらはすことなり。末代をほしか  
ある事ども多かり。」

用光が堪能の一曲猛き海賊の心を和げ危き一命を助かりしは奇符の至りなり。これ鳴無大神  
の神助の然らしむる所なるべきもまた用光が如何にその道の名人を在りしかを察するに足らん。  
此の事は現在小学館語説本巻七に「苗の名人」として載せられたり。  
かく鳴無宮の毎年の大祭お船遊には如何に都に名取りたる優れし藝人の下り来りたるかを知  
り得べし。  
お船遊の御有様は今詳にする事を得ずと雖も上代平安朝の奥貴人の洛西大井川のお船遊あり。  
又藝州宮島には今も在る管絃祭のお船遊あり。大凡大同小異にて鋪繡を飾りたる御座船に神  
輿を据へ奉り衆人は茶を養しみめ美しき舞姫は長袖を纏して舞を舞ひ御神慮を慰め奉りし  
事なるべくその優美さは真に一幅の絵巻物を見るの觀ありしなるべし而してその御座船を撃  
ぎたりと云ふ綱掛松守に存す。  
互に現に行はれつゝある八月二十五日御祭典お船遊の概略を記さん。

鳴無神社の御祭礼

當社の祭礼は旧七月三日及旧八月廿三日の兩度にして何れも大祭なり。七月三日の祭を科戸  
 辺祭と云ふし、志那祢祭と稱す。明治六年より改曆八月二十五日を以てその祭日と定む。  
 旧八月二十三日の秋祭は今に變る事なし。今志那祢祭の御有縁を記さんには  
 一、志那祢祭の意味につきては古来種々の説あり。或者は志那祢祭は「しなひね祭」の約  
 りたる語にて船の秋熟せる意味なりと云ひ又新船を奉る儀式なるが故に「新船祭」にして之  
 が約りてしな祭と云れりとも云ふ。然れども此の祭は最初「科戸迎祭」と稱せし由まれば  
 此が約りて「しな祭」となりしものなるべきかと思はる。  
 其の祭典の次第左の如し。

八月二十四日の夕、宵祭あり。神職、社人、神社惣代等祭典に参列す。村内外よりの参拜者  
 夥しく燈火を點せる参拜船火影を江上に映し海浜には神燈を点じて美觀を呈す。  
 二十五日の志那祭当日は正午頃より官祭執行、続いて旧祭典に移り、社司、舊神職三人にて  
 祭典執行、村役場員、学校職員、駐在巡查、神社惣代、社人等参列、午後二時頃御神幸あり  
 。御神体を神輿に移御し、社人これを曳ぎ奉つて御船に乘御す。  
 御座船は深浦部落より、脇船は横浪及鳴無より各一艘づつ奉仕し、御座船を中央にし、脇船  
 をその兩翼に連ね、神職以下社人等扈從し、お正面を此御し、櫓聲勇ましく御神幸あり。鳴  
 無の御旅所に御上陸、御祭典執行。此の時社人「かや」を結んで海に流す。此のかや一宮の  
 かやと一箱になり、その箱に上りたるを是る者なしと云ふ傳ふ。  
 かくて再び神輿を御船に乘御し、中ノ浦若宮沖に至りて遙幸し、更に横浪遠幸所に御上陸御  
 祭典あり。尤も横浪遠幸所へは一年置に御神幸あると列とす。かくて御乗船社殿に還御あり。  
 祭典終つて直會として、参列人に飯、茄子及瓜を肴として神酒を振舞ふ。飯と瓜米を二回蒸

したるものを肴にて搗き碗に高盛にせるものなり。

此の御神幸には一宮土佐大神も一宮より遙に御神幸あり。鳴無大神と御対面共に神輿を並べ  
 て御船遊あり。歌舞音楽を奏して御神慮を慰め奉りしが、一年土佐大神の神輿還御の初、長  
 浜にて艤難に遭ひ給ひてより、亦未鳴無神幸を廢するに至れりとぞ。

旧八月二十三日の秋祭は、前日宵祭あり、前年のお当家、ぎようじ(男の鬼)いたじよう(へ  
 女の鬼)、ぎようじ(たてへぎようじを頸馬にせる人)、いたじよう(負へいたじようを負ふ人  
 )、今さし二人、御幣さしへ御幣持ち、守深へぎようじ、いたじようの大小便を始末する  
 者)及社人等参列す。

翌二十三日は午後二時頃より祭典を執行し、其の年のお当家、ぎようじ、いたじよう等参列  
 し、お正面迄御神幸あり。此の時お当家、ぎようじ、いたじよう等の供人、舟より上り、神  
 輿の後に從ひ、御幣さし、

チリヘツポウ、ササラマート、ワカハリシンメ、と音頭をとれば、ぎようじはて  
 ヨーロツヨ、マーデと歌ひ、いたじようは次で  
 ワーカミーヤ、ササラマート、ワカハリシンメ、と歌ひながら、此の歌を七回繰り返して  
 て御座所に伺候す。御座所は鳥居の内側に臨時に造れる御休憩所なり。此處にて祭典ありて  
 後、御社殿に還御せられ、供人一同に直會あり。飯は生薑味噌、青菜の塩もみ、田芋汁及神  
 酒を振舞ふを例とす。

此の日東弁より小踊と云ひて鐘叩き一人、太鼓叩き二人、唄手三、四人、踊手數十人出で、  
 踊を奉納す。  
 先づ最初二列になりて、神前正面より踊りながら進み来り、左庭にて、唄手、鐘叩き、太鼓

叩き中央に位置し、踊り手はこれを囲みて円形をなす。かくて円形のまま、唄及鐘太鼓に合せて踊る。唄手及鐘叩きは青年中より送ぶ。太鼓叩は子供中より送ぶ。踊り手は青年、子供入交れり。鐘叩きの扮装は草鞋、脚絆、手籠、袴、鉢巻の整装にて、太鼓叩は草鞋、脚絆、牛籠、袴、たまり、鉢巻の装束を飛しく、踊り手は花笠、或は鉢巻にて装束せる大因頼を持ちこれにて踊る。此の小踊り古くより行はれ、今に至るまで愛する事なし。また御土藝術の一つなり。

土佐大神の神輿狼害の事

嘉禄二年古厨子裏書によれば、土佐大神（土佐神社）は此の社と同神一本の神にして、今より約一千二百年前淳仁天皇天平寶字以来、毎年祭時に此の横浪三里の地に渡御あり、兩大神の神輿相並ぶて御船遊の祭事を行はせ給ひ、今より約七百四十年前鎌倉時付の建久年間まで引籠り行はれり。神使逆川越智守（越中守）惟宗信口が御迎に参りし記事あり。斯の如く土佐大神の毎年渡御の御船遊は一千二百年来の年々の行事にして、全国にも知れ渡りたる名高き祭典なりし事、左の十訓抄等の物語にも知らるべし。当時土佐大神御神幸の御道順は、土佐郡一宮村を以て、船路にて、浦戸灣を横ざり、浦戸、長浜、ア原、甲原、仁ノ村、西畑、新居、宇佐等の海浜に至り、此の横浪三里に御神幸ありし模様なるが、一と歳、土佐大神の神輿は此の地に着御、鳴無大神と神輿を並べ御船遊あり、式終り帰途に就きけるに、長浜の南方名村々鼻にさしかかりし頃、強風は途を急ぎ舟を、御船をとどめ、神輿を磯傳ひに廻らせしに、日も暮れ果て赤木山の麓にて、狼数多群り出で、飛びつき喰ひつき神人氏子等傷き殺さる、若魁を

からず。生き残れる者共、神輿を其の場に打捨て、命限り長浜の人家に逃げ込みたり。かくて長浜の人々も打驚き、手に手に炬火を点し、鐵、鎌等様々の武器を携へ、決意に至り見れば、狼は神人を嗜殺し所々手足残骸散らばり、目も当てられず、神輿は波際に打捨てありけり。これを見かねて、舟を早めて帰らんとせしに、數百の狼は目を怒らし飛び撲らんとす。炬火の光を恐れて近寄りず、かくて漸くにして神輿を一宮村に送り届けたり。されど斯の事は全く神慮に叶はざるの致す所なりとして、土佐大神の鳴無神幸は、是より全く中止せらるゝ事となれり。

これより土佐大神は毎年吸江五台山の西麓に御旅所を造り、小一宮と称し、此處に神幸あり。御舟一宮を出づるや浦々數多の漁船、五彩の旗を建て、色綱を以て之を曳き、船歌を歌ひて、エイ／＼の聲を勇ましく、御船を曳き、御旅所に到る。これ昔の鳴無御船遊の名残を留めたるものにして、近代に至りてこの小一宮渡御も亦之を廢し、一宮社前數町の御旅所に神幸あるに止る。而して土佐大神神輿の本社を出づるやその昔鳴無神幸の時炬火を以て狼害を免れたる故事により、供入皆松明に火を点し、百晝數万の炬火神輿の前後を擁し、黒煙天を焦がし數里の外より之を望み得べく、土佐神社祭典の一大偉觀を呈するは、人のよく知る所なり。

鳴無神社御建業

當社は其の歴史極めて悠久なるを以て、御社殿の由来亦極めて古し。前文屢々引用する、嘉禄二年古厨子裏書の末に曰く、（書体不明の所あり原文の傍記す）「上恩」其後正治二年庚申年八月此御社殿造之供僧相祐也。惣此御寄御宮奉造之御神樂舞遊

其後三十年云嘉祿元年丙戌二月十日乙未時神火發御寶殿燒給畢其後神主供僧余人等七日請進同日天知此口口恭參借御宮殿造立内御二寸余御神躰口口御宮殿二大外境ス林ト燒タル本トノ内ニ御座シ奉畏供僧教仁奉込御宮殿其後五月五日御神樂天本躰末九日奉畏御夕クセムヲ蒙事也燒終後八十五日或九日天巳時奉得單神主蔡光守供僧教仁八幡宮供僧玄仁神方俗定賢茶守光口大中臣貞國大中臣貞久越智四郎此ツシ奉志サン口現世安穩後世善所為奉口者也燬習真光。此の文意によれば、當社の上付は忠に自、鎌倉以後の沿革の如し。

土御門天皇正治二年神殿建築。  
後醍醐天皇嘉祿二年燒失。

(此の時長三寸の御神体焼けたる床木の間に移り坐す。)

大凡右の如し。然れども其の後瀧桑の爰知るべからず、現時の社殿は寛文三年山内二代藩主忠義公の寄進造営にカ、るものにして、其の棟札の文左の如し。

奉造立賜無大明神御殿 忠義公

寛文三年癸卯八月吉祥日

作事奉行人

池田綱右衛門

沖 崎右衛門

吉松 甚太夫

須戸仁右衛門

導師 青竜寺法師榮周

別 當 源光寺 頼 運

神 主 喜多代兵衛大夫家次

即ち現今の建物は、忠義公の御造営にカ、り、其の巧緻、本縣大目有餘の神社中、斬然傑出せり。

其の用材は悉く神代杉の柱目のみを使用し、工法手技は功妙を極め、建築の粹を盡せるものなり。大工は名匠五左甚五郎の一族の子孫なりとの説あり。

(山本淳氏曰く、この社殿は忠義公時代に清滝寺、永國寺、真妙寺、足摺岬本殿塔、仁王門を建立せる、加藤大兵衛なるか、若くは、阿豊八幡宮、土佐神社仁王門を建てたる大田五左衛門のうち、何れかならんと推定せる。古老の傳ふる左甚五郎の子孫といふは、前記の二人の内なるか又は他に存するか、後人の研究に待つ事とせん。)

建築の要部は單に椽一本を用ひて之をとのたけりと賞讃せらる。特に本殿の如きは、あらゆる部分に極彩色を用ひて全社殿を彩り、花木神仙鳥獸の彫繪は狂飛にして、土佐に於ける古今無比の美術建築にして、人目を眩せしむるに足る。社殿の位置はよく天然の美を背景とし、これに加ふるに人工の美を盡して遺憾なし、其の後方は深山を眞ひ、前に碧海を控へ、社殿の倒影を江水に寫す状は、安藝嚴島神社に比すべく、天然人工の粹を盡せるものといふべし。本殿は両面して春日造桐葺の、二間四面にして椽の上には千木、勝男木高く聳え、正面千鳥破風の部介には懸魚あり。椽木を受くるに優美なる大椽束あり。結繩の彫り方極めてよし。その下方には深あり、深の下には壁股あり。本殿の屋根裏は繁並木にして、地並木の外に飛橋並木を現けし、向拝の部介には打越並木を用ひ、總破風を附けたり。椽の背面即ち東側は、切妻に畧され、裝飾なきも、南面及北面は同一に化粧せう水、桁の下には木枝輪ありて要

板之に施き、極彩色の雲と波の模様と互にその美を競ふ。

柱頭には二手先の斗組あり。極彩色の蓮の花の模様ありて、斗組の上端は要形斗木なり。枝輪の下には三柏葉の紋を透彫とせる装束あり。本殿内陣の装飾は婉雅にして、人目を眩せしむ。天井には伽藍須弥の絵あり。寛文三年の依なり。

(山本意氏曰く伽藍須弥の絵は勿妙を極めたり。この絵は狩野派なるにより、忠義公の抱絵耶たりし村上通円の描きしものなりんと、意氏は公円三の丸の大書院の大玄門の上段の間に、張良黄石公の図を描き名寺の名を得たる入なり。)

本殿南北の脇障子には、松の彫刻あり。頭貫の部分には寶相華の模様あり。柱の下方のものに脱落せるも上部には款朱等にて極彩色の模様あり。濃墨艶丹碧相照映せり。

向拜柱は四本にて、それを取り附けたる彫鏤は精巧を盡し、刀法深く立体的に厚きを遺憾なく表現し、人をして驚嘆せしむ。向拜の虹梁の木鼻は龍にして、向拜柱の間に三面の雙股あり。他に比を見ざる優秀なるものなり。向拜柱と虹梁との間の下方にも、彫刻あり、勿妙なる枝石を示せり。階殿は柿葺、切妻造にして桁行三間梁間二間にて、屋根裏は曾瓦の方法にて疎坐木なるが、用材は悉く神代杉の柱目なり。中央に梁木あり。梁の上には両端のものに三柏葉の紋ある装束ありて、内方の梁には棟木を穿くるに大椀束あるも天井なし。拜殿は西北に面し出端踏形をす(土佐神社は入端踏形なり)南北に長く延びたる切妻造相葺にして、向拜は軒唐破風を附け押を極めたり。桁行五間梁間二間屋根裏は化粧屋根裏にして、正面に三柏葉の紋ある板装束あり。柱頭は大斗と肘木のみにて斗組の無きところ反つて雑敷を有す。切妻の側面には大椀束ありて、その形珍奇を盡せり。本殿に比し拜殿は無彩色にして用材の木質その再現れ、手法優秀なるを以て、極めて高尚にして清酒の類あり。

(以上地主として山本意氏主在美術史による)

かく當社殿は縣下唯一の貴重なる建築なれば、これを保存の必要を認め目下國寶申請中なり。

### 鳴無神社 御棟札

當社は旧社にして嘉祿二年の古厨子裏書によりても鎌倉時代にはその造営あり。亦未天災地変様々の災厄に罹り、社殿の荒廢する事数回、而も其の都度御土の檀能有志領主大名の手により、再興修葺せらるゝ又籤圖を有るを知らず。事皆記録に傳載し且つ若干の棟札を存じ、其の事實を徴するに足る。

而して之等の棟札は享保八年決時藤十郎勝之が其の古品の殘破を惜み模造品を依りてこれを今日に存す。今之によりて見るに、其の概要左り如し。

- 一 建長三年辛亥十一月九日
- 二 正和二年癸丑十月二十七日
- 三 貞和三年丁亥六月朔日
- 四 至徳四年丁卯二月朔日
- 五 鳴無宮永享九年丁巳八月一日 大願主沙弥伊那辨男隱岐守藤原國文神主平人佐平文清別當者門
- 六 鳴無神社上尊大檀那藤原國雄嫡男圓修用左七念三月十二日
- 七 帯命鳴無三坊大明神永正二年乙丑八月二十三日 平氏次孫次郎
- 八 上尊天文廿二年癸丑三月九日 大檀那 想番衆中且那山本修理之助、初生右京助

吉本掃部助、中之備前守中間藤左イ門



別當大主良昌

神主太郎兵衛

九. 上尊慶長十四年己酉八月十四日、國主山内府馬守豊臣康豊公御代官、福岡内膳正、下

代領山内四郎才門、願主中村久兵衛

十. 上尊寛永十一年甲戌八月廿日國守松平土佐守四位侍從忠義公本領主権大曾都殿莊屋中

村太郎才門

これを認め、臣代土地の豪族領主國主大名の榮敵常に深かりしこと知らる。

永享明応頃の藤原國文同國雄といへるは高阿郡蓮池領主大平氏にして後土佐七人衆の一に列せる土佐豪族あり。又慶長十四年の山内康豊公は二代忠義公の弟にして元父名を襲ぎ康豊といひしを徳川二代將軍秀忠の備前を給ふて後忠義と称す。

斯の如く當社は御土屋指の領主大名次第に漏れして寄進造管を怠らざりしは如何に臣代國中上下の人々の尊崇厚かりしを知るに足らん。

其外棟札左の如し。

十一. 奉造立鳴無大明神御殿忠義公寛文十三年癸卯八月吉祥日、依事奉行人池田才門、中

侵才門、吉松甚大夫、領主才門、導師青龍寺法印栄周、別當源光寺頼運、神主喜多

代兵部大夫家次。(これは現在の御社殿御造管の時の棟札なり。)

十二. 上尊貞享三年甲寅閏三月豊昌公別當源光寺栄受、神主喜多代兵部大夫、庄屋久武才

門

十三. 上尊元禄十三年庚辰四月廿七日豊昌公別當兼寛神主喜多代兵部大夫、庄屋久武才門

十四. 上尊享保八年癸卯七月吉祥日國主一豊公ヨリ七代豊前公依事奉行法寺藤十郎大工門田

惣依、導師青龍寺現任権大僧都文龍別當源光寺栄惠神主喜多代兵部大夫、莊屋久武大才門

十五. 上尊享保廿年卯月七月朔日大守豊教公遷宮導師青龍寺現任法印、文龍別當源光寺在、

大法印文亮神主武下文大夫、依事奉行宮地五郎右才門大工儀八、莊屋久武要助

十六. 上尊元文四年九月十二日別當文文神主文大夫

十七. 上尊延享元年甲子五月吉日

十八. 上尊寛延元戊辰十二月吉祥日

十九. 上尊宝暦五乙亥年十二月吉祥日

二十. 上尊明和三年戊午正月吉日

以上棟札により明かなる如く寛文三年山内二村藩主忠義公現在の御社殿御造管亦未敷田屋根の毀損を惜み上尊せるも其の建築内容は少も首に衰らず依然として二百数十年の建造を保存せり。

鳴無神社 御宝物

鳴無神社は名社なるだけに多くの貴重なる御宝物を奉祀す。唯桑滄の變と風霜の浸害を被り往々破損し其の姿を失ひしは惜むべし。但し神社帖、土佐探古録、南路誌等正確なる記録に託載され其の曾て存在せし事實を確する事を得るは不幸中の幸なり。

其一 神輿 (現存)

現在保存する神輿は今より約三百年前長曾我部盛親公の寄進に依り高さ四尺黒漆塗八角形極めて雅緻あり。其の銘に

鳴無社御國主秦盞親公御代官親屬、願主介家、慶長五年季夏子七月三日、然るに後破損あり之を修理す。棟札に

再興神興元文三年六月廿八日別当源光寺在文亮代奉願御修而後有之。尔後毎年の祭典に之を使用し漸次破損を加へ来る惜むべし。

其二 日鏡 (現存せず)

曾社最古の御宝物にして長さ一尺五分幅七寸三分表は銅板切抜き鳴無大明神の五字を付し裏は銅板毛彫にして文保三年己未三月三日大願主上公文平朝清敬白と記し其の銅板の上に玉柄を付す。

又保は花園天皇親權北條高時時代にて實は六百年前の旧物にして盗難に罹り今存在を失へるに惜むべし。但し土佐探古録及南路誌に其の記載あり。

其三 半鐘 (現存せず)

半鐘には左の銘あり。

奉施人土佐國高岡郡浦内鳴無社、亦永更寅仲春日、檀那妙性大願主比立桂久

其四 鯛口 (現存)

鯛口には左の銘あり

鯛口一口右因國主從四位侍從藤原忠義公再興於國內高岡郡鳴無神社の役工繕之謹奉寄附諸神前名也

寛文三年七月三日大塚御右門尉勝重

(即ち此の鯛口は忠義公本社殿御造営の時奉りし物なり)

其五 大般若 至尊 (現存せず)

大般若經尊本六百軸三後全奥書曰于時永和三二年七月廿三日大檀那近藤藤藏守因兼又七十三卷奥書曰奉施入鳴無大明神御社大檀那近藤藤藏守因兼敬奉乘用一校終又管之銘曰此檀前寄進于時。

永和三年丁巳正月十日大平藤城守

其六 不燈籠 (現存)

一對寛文三年八月廿三日山内下総寄進

其七 金燈籠 (現存せず)

一對寛文三年八月廿三日生駒木工寄進

其八 金燈籠 (現存せず)

一對寛文三年八月廿三日 岩寄十之丞寄進

其九 金燈籠 (現存せず)

一對寛文三年八月廿三日村田三壽寄進

(右の内鯛口は、半鐘意口、金燈籠並対内虎傷有、石燈籠並対、計四齋は神佛分向に際し明治五年未六月廿三日當時の祠官北代治龜浦青龍寺に預置きたるを石燈籠は明治中、鯛口は昭和十一年七月三十一日受取りたるも他は青龍寺にて虎掃ひたるものなりん。現存せず)

其十 白練狩衣、袴、烏帽子共二人前

松平土佐守忠義公寄進

其十一 布狩衣烏帽子共十二人前

松平土佐守忠義公寄進

其十二 舞衣並鈴

松平土佐守忠義公寄進

其三 衣裳絵歌仙三十六枚 (現存)

寛文三年八月廿三日百々刑部寄進

其由 切立 一対

寛文三年八月廿三日岩崎十之丞寄進

(右諸品自然に汚損す)

其五 金幣 一振

表 高岡郡浦ノ内嶋無大明神

裏 元禄五年壬申八月廿三日領主松入姓源左イ門

其六 金幣 一振

寛文五年乙巳九月深尾七郎重直寄進

其七 金幣 一振

寛文十五年八月 日 中村文治寄進

(右明治十七年五月盗難に罹りたる由)

其八 右鐵盤一基 (現存)

刻 曰

國君從四位下藤原忠義公再興於國內高岡郡嶋無神社而三臣戮力使工彫琢之謹奉寄進神前者也

寛文三年七月三日

臣 尾崎采女

波谷権左イ門  
早寄 小傳次

其十九 面 四 (現存)

(年曆不祥最古付の製作の如し)

其二十 青貝の鞍 一 (現存)

(年曆不祥巴新三郎寄進と申傳ふ過半欠損して僅に其の形を存す)

其二十一 太鼓 一

寛文三年八月廿三日 竹島三右イ門寄進

其二十二 矢根 三本

元〇二年八月廿三日 深尾左京寄進

其二十三 鞍馬 二枚

(年曆不祥本水共当社再建と公時に寄進の由申傳 深尾帯刀寄進)

其二十四 國主山内豐實公「觀化」額 (現存)

其二十五 國主山内豐實公「昭飯」額 (現存)

(詩經に「天監有周 昭飯于下」とあり飯は至なり。)

其二十六 御神酒 錫

大黒坂左イ門寄進

其二十七 花 籠

松田五郎大夫寄進

其二十八 錫 切立

横田助右イ門寄進

其二十九 額 一枚 (現存)

但黒塗彫刻文字（実勿書体草書）

絶たるを継發するをおこすは聖賢のなす所なりといへり。さるに今此國の司の守從四位下侍藤原朝臣忠義公。曰城隍神の光魂を忘れ給はず、神社佛閣の古蹟を再興し給ふゆる御志絶へず、去し年の霜月下旬、高岡の郡嶋無の宮にまうて給ふぬ。

折しも雪いみしう降つもり白妙に明もて行瀬山のたたすまひ長汀遠渚の眺望いふもさら也。唯尊主信心の先途を照し給ふゆる神納也けりとおほゆ。蜂蝶の詞のいやしきも志するには解りなんと益立ちあへぬか反はし聊こゝに書付はへる。まうでくる君公齡を千年手でかはらす守丸・嶋無の神。

雪にあけて危音なし神の庭。  
つとめてかへらせ給へるに旧藩の領東を改め宮作りし給ふべき由仰事有き困窮民安けれは遠駅の厩にふせしめゆる翁、山野に牛飼従角のたぐひまでもみな万歳を唱ふる声は三笠の山の昔にかへり、ひろき御恩の慈光は築波山の蔭もこまなからんかし。下官も衣裳絵の歌仙三十六に丹青の白紙秃筆を抛て神前に林大守長久の安寧を禱るものなり。

千時寛文三癸卯曆八月廿三日

百々内刑部安政

其手 忠義公御目錄（現存）

寛文三年八月廿三日忠義公御参詣目錄

献 上

御 太 刀 一 腰  
御 馬 一 疋

松平土佐守忠義

其主 豊彦公御目錄（現存）

金 子 百 疋  
以 上

松平土佐守豊彦

山内忠義公の御参詣

凡そ神社佛閣にして國守大名の特に之を信仰するものは其の由緒の極めて正しきものなり。或は社殿を造営し或は神室を寄附し又親しく参詣し其の尊敬の誠を致す。此の如きは神社佛閣の皆以て其の丁史の誇となし、其の社格の尊貴を示す材料となす所にして、此の意味に於て嶋無宮の土佐大守山内忠義公に於ける關係の如き、實に土佐一國に於て他に並ぶなきものといふべし。

忠義公は山内二代の藩主にして英明剛果の聞ある名君なり。一代の同常に領内の神佛を尊崇する限りなかりしが、特に嶋無宮を尊信し給ふ事篤く巨資を投じて社殿を再興し、多くの寄進をなし神域を整備し、加ふるに二國に亘りて多くの臣下を起従し、望々たる大名行列の下に、御参詣ありしが如き、山内三百年の藩政に於ても、他に比類なき所なり。

公は寛文二年秋高岡郡青竜寺に遊び、更に嶋無宮に参詣し、其の格別の聖地なるに感じ、直に社殿の再興を命じ給ふ。事南畝志に詳なり。茲に掲載せん。

忠義公青竜寺御佛詣之記

寛文二年秋の頃青竜寺本坊貧僧にて寺廢事ふりて破損するを國司聞召て遣立被仰付當冬初に成就成玉ふ。田益在坊作事御目にかり度口有内存寒天被成殊更御病中に奉申請事如何と遠慮有て其言不及言上。然必に御國守その心を御推有てや又彼寺御覽をさ水んとてや電の御寺久敷御佛詣をし。近日思召玉はんと其旨青竜寺へ御遣はさる。

住坊有難思はれ山上下の板口内外の諸掃除諸且那殊には山内下総守年来祈念の院主にて御成の道具五三日前より持下に人を差越用意方なく相調ふ。

叔曾霜月廿六日未刻御發足御舟にて御出船成玉ふ。御供の人々に深尾帶刀（兼老）百々刑部少輔（兼老）村田玄壽（御医師）生駒木工（御手廻）小堀世十余人、福岡内丞、市原政平、入沢求之助近江守、西野權平、瀧美井之助、東野金兵衛、能々傳内、長屋權平、朝比奈秋之助、大黒次三郎、小田原平兵衛、谷村次郎四郎、島崎兵四郎、宮寺八兵衛、御中小性、大小性、中板田五郎太夫（物頭）、大塚申左衛門（物頭）波谷權左衛門、早寄小傳次、尾寄采女、安積長助、中山藤左衛門、伊藤八郎九兵衛、島飼三太夫、平井善丞、寺田源三郎、馬場右衛門五兵衛、前野七右衛門、大黒次右衛門、竹島三右衛門（御用人）池九兵衛（大機目）深井口右衛門（御仕置）林清官（唐人の子、耳のあか取）久吉五工門（御船大將）右之外歩行各御手口機目、

明る霜月廿七日刀刻、宇佐浦御着岸にて、其の日は宇佐の淡御殿口に御休息有て、翌日廿八日青竜寺院主、朝御膳上られ、御膳過て、御堂并御船山御佛詣をし、御下向有て後口御發兼能青竜寺へ御持参銀子、御樽、昆布、過分被下御酒の中下総口口入門田善兵衛、市

村太郎右衛門、西人被召出、下總病中をるに西人下は羨惹口口別而御満足に思召と西人に御盃被下難有御意西人志御説身に余り謹而奉頂戴、御酒臭納り、御茶過て申刻、宇佐浦御帰座をし、翌日は御精進日たるに依て續々と御休息有て、三十日には其辺の漁夫網舟とも催し網を引せ御覽有に、事の外の鱗共引上、御様嫌不斜、獵師共は御褒美御樽共被下。

夫より鳴無の宮へ御社参にて所の風景を詠させ玉ふ、かゝる景気の所とは兼て思召寄給は

す。板もく、殊勝成聖地かを。社も事古く悉破損に及たり。いか擬造立仰付給はんと神主宮人等に仰出されたり。叔守佐浦より此方彼方板あはれ淋敷所敷有と見え侍るに、誰か心あらんは一首一句も有度事なるにいづれかと宣ひければ、生駒木工、玄寺兩人聚て、刑部小輔腰をれとゆつらぬるるとて其主翁に書附持参らす。御所望もやと言上あれば、忠義公聞召て、そ水こそ聞まほしけれ。いかにくと仰けるに刑部深く辭退されども是非ともねと御所望により、余りの異動も憚成と、御意に隨ひ津申されたり。

鳴無の宮にて巻句

要にあげて嵐おとをし神の庭。  
詣来る君かよはひを千年まで

かよらぬ守水鳴無の神。

忠義公聞召て、不知、寺持千壽か々と御慰まします。又或人詠て、詠人不知。  
我君の詣のちかひあらたにて

鳴無の神も高く聞ゆる。

山の姿大小の猶、夜をつらね、左右前三方は海をかへ、岨々たる岸々口傳ひ四方十方の  
気色実の類ひあらじと見へわたり眺ことなる鹽池、言葉にも岸にも及かたし。  
昔貫之の日記、土佐の入江の舟違と書置れし所とかや。後の山樹茂り崖に落る木葉の音は  
湘々の夜の雨とやいばむ。

叔宮寺のかつり大かむのづからなる山の洞、さながら夜の中にして月日の影ほのみなる  
よそほ洞庭の秋の月といひつべし。

朝夕の勤、打鳴す鐘の聲は遠寺の曉鐘と聞えし。奥浦向ふの岸高く降積む雪の白妙は江天  
の暮雪と名付べし。あたりの浦の漁父網引釣の友とち已し、海士のよびこゑ遠く浮に引さ  
らす網は漁村の夕照と面白く浦々の淡つゝき並居つくれる民の庵は山市の晴嵐の心ならずん  
谷々の山の端入海にさし出島隠れなる舟の往來は遠浦の帰帆かと思はれ、沖の木島の雁の  
あざり集る有さまは平沙の落雁の左くひにて九入景眼前に見え爰風景かろぬ内海なれば  
、刑部少輔所々にて言捨の口すさむ、或人詠歌など待りぬ。奥浦暫過て御出船の浦山なつ  
かしく尋ねさせ玉へば漁父兼に舟長とも是彼と答奉る。  
まづ浦の内にて刑部少

あひまきしておのかさまく漕舟の  
気色えをらぬ浦の内かま

或人詠て  
土佐の海のなれりまや磯にこそりつゝ  
あみ引まはす海士の呼声

さて出暮といふ所の沖にて刑部少

いにしへの名のみ

此浦山をるを谷深く海漫々として物淋し、いか様よし有げなる浦山の躰いかにとばせ玉へ  
ば、漁父兼て、

此所はいにしへ名山良きすらへに住玉ひ空敷過させ玉ふを即此所に納め奉りて石塔寺にま  
しますといふ。

それ付て諺人不知  
腰折に

なきあとの世にはふれとも上人の

形はのこる花の山寺

花山院の御廟所なれば花の山寺とや。

初過つる雪の浦山とも消かしたれば白妙を見て、

散花とあらしや見せし木々の雪。

磯へ打渡こそちらせ雪の花。

叔又其辺に惠心僧都の千体の政院佛を依籠置玉ふ御寺有、其詞を問せ玉へば、漁夫兼て、  
昔此浦の内と申三里の内外に佛法と云事を不知、唯海世のみせき斗なるを、僧都不便に思  
召て何卒佛道に尊き玉はんと、三里の内外の鱗ともをばたと留め玉ひて網をひき釣をさせ  
ども更にぞこ一つを取争をし、機嫌とも痛て、かくあらば浦決の漁人みそ鐵死に及べし。  
いかゞはせんと説あへる。

此時僧都遠近の諸民を集め、此浦にて魚を取べき祭の文言は、其文言を教へとらせんそと  
、のたすへば、漁父とも兼て忝し有がたし、教へ玉ひて諸浦の人を助玉へといへば、心得

王の外には先網を置べし。引上る時父を教へ王せんぞと、即網をおろさせ、叔母々網を  
かへ此父を唱へ引けとて、

此浦のなりの雨無といふ魚有り、あみと云手ぐりをだぶといひて引や  
と口々に唱へ引けと教へ玉ふ。その如く唱へ引上たれば鱗細に余る斗に引上、浦々の諸民  
有難し尊しと僧都を留暫馳走し奉れば連て佛道の理をしめし玉ふ、佛といふは現世無悲衆  
、後生善所の御誓にて、南無阿弥陀佛を信じ奉れば魚をも取て此世をも助かり、死ては不  
生不滅の地に至る也。末代忘れぬ志をせよと、千体の阿弥陀を依懸置玉ふ。浦の内千  
体と申傳ふ。今にまします。と語おらする。近習の人々懇に甲上御懸に思召と申させ玉ふ。  
夫より浦傳ひに立目といふ浦にて

刑部少

心から木々の立めも春めきて

見よや雪さへ花の面かぢ

詠人不知

竹から冬の五日のをらひて

浦山里も雪の白妙

王島といふ沖にて

刑部

雪のいろは玉島みかくあさ日哉

又詠人不知

玉しまさかくすや雪の大ふすま

叔又入海にて

刑部

出る舟入る舟見へて此海の

気色ことをる雪の明ぼの

詠人不知また詠て

こゝ舟の昔や笠にも雪つみて

島の流るゝ海とこそ見れ

叔爰かしこ詠渡らせ玉ふ中に日も夕暮にまれば、浦々の舟を集、御道しるべの爲と舟一艘  
にカも楫、とりかぢ、松明ニ三ヶ所づゝとほしつれて、海中に二双へ御座舟、通一筋あり  
て海上に道を付るるにひとしく、陸地を見渡せば、左右の浦々清にとぼすかぎり火寸又の  
間もなく、譬へば丸夏の夜のころほむ、宇治の殿を見るにも、是にはまさらじとおもさ  
ければ、哲人の子の清官も目を驚し叔は是はたじならぬ御事也。唐にもかゝる曰覧る事有  
難からんと、あき水て感じ参らする。

花やいづれ浦の皆壘の今朝の雪

松島や小島の景色この浦に

くらべていかにはおとるべきかは

詠人不知詠みて

人も見よ字佐とはいはれしゆきの涙

皆壘さや花は明なすみゆきかな

扱御聖船程なく御着殿にて、翌日極月初辰上刻御出船、同日申刻高知へ目出度御帰城にて、其又翌日下総内門田善兵衛に御受取、市村太郎左衛門に御初織被下忝家仰謹而奉頂戴下総より御礼使者差上申さる。同日子息織部佐同御礼登城、翌日忠義公より下総へ青竜寺口口病中の御左右旁御使者被成下御懇の御意也。

鎌田勘丞依之口也。

右によりて見る如く公は寛文二年十一月廿六日、家老深尾藩刀以下百余人の臣下を従へ高知城を登り、舟大將久吉左衛門、水夫を相釋し、二十七日守佐着、二十八日青竜寺に至り本堂並に杖鉾山に参詣あり。廿九日精進、三十日瀨民網引を興深く御覽あり、それより鳴瀬に向はせらる。入江の風景、宮の左、すまみ珠の外御意に叶ひ、かゝる景色よき所とは兼て思ひよらず。猶々殊勝の聖地かな。世も悉く破損したり。いかにま違立御付け給はんとは仰出されたり。

此の時公は左方を顧みこ丸程の聖地なり。誰か一句流めと仰せあれば、百々刑部直は筆を把りて

雪に明けて、嵐音なし神の庭、

又

詣てくる君が換を千年まで

かばら守丸鳴無の神。

とぞものしけり。

公之を御覽ありていたく御称賛あり。猶日夕暮とそむれば村人共道知るべとて舟毎に面楫、取楫勇ましく、松明二三ヶ所づゝ燈し、江上に一直線は公の御船を導き、陸上には左右

の浦々亦炬火を並べ焚き、明るき事畫の如く、其壯觀並ぶものなき處に公も非前に満足なり。

ゆがて守佐に着し御一泊、翌日高知に帰城なし給へり。

かくて公鳴無神社御再建の命により、大工番匠共日夜工事を急ぎ翌寛文三年七月落成す。

八月公又海路御社参、其の落成式に列し給ふ。今日の社殿は即ちこれなり、公落成式御参列の状況左の如し。

寛文三年八月廿二日浦戸より御座船に召され南海を航す。御船印の吹流は顧籠として秋の嵐に飄り百余艘の伏船は錦の織を附け、力を競せ、掛声勇ましく、公の御船を曳ぎ、百千の櫓聲は浪を切り、船歌の声は海を揺がし、其の壯觀驚ふるものなし。

日暮前守佐に着し、其の夜は同地は御一泊、翌二十三日再び御座船に乘じ全一の行列を以て横浪三里を一路鳴無に向はせ給ふ。

楳々鳴無宮に御着、御覽あるに、社殿は今觀新に建てられたれば、飛橋高く林表に聳へ、五杉の丹碧燦然として緑波に映じ壯嚴言ふべかりず。

公は御上陸参殿し給ふ。群臣百僚其の後に羅列し嚴かに玉串を捧げて弁礼あり。かくて神職、宮人及び御道管に預かりし者共に夫々恩賞あり。土民喜びて神前に踊を催ふし、公の上覧に供す。日暮に及び公守佐に御還りあり。土人松明を焚き之を迎ふ。数里の間火光海を照らし白晝の如し。翌二十五日青竜寺に渡り、二十六日高知に帰城せらる。

備臣黒岩善庵の鳴無紀行及び吹江寺湖山の鳴無宮再興記は共に当時の状況を記せるものを採ば、こゝに挙げん。



日域之南土州高岡郡浦內有一廟。曰鳴無大明神也。

前臨江浦後聳山峯。老樹森列茅社深沈。火籠灑灑蘿月排五更。獨結數聲絕松風奏一曲琴華表無鷗到空林。有鳥吟荒敗極一矣。誰不傷心。于時實文二年壬寅仲冬下朔太守從四位下裕道藤原朝臣忠孝公被飛桂權於青龍寺之次有大明神是顯社之傾側懷古之慈益深。遂屬家臣復興焉。依是陪者從其志而奉寄進于神前。其功多敏（未記之）翌年癸卯之秋邦君再興之功漸出而廟宮盡美。並臣等附之物漫備向惡蓋恐禪蓋夫廢興已有時或感感豈無効乎如冀神德浩々世跡千仞門聖鑑昭々和光於國土國家萬歲福壽千秋至祝至禱。

鳴無和行

黑岩 卷 卷

鳴無神社在上城西南六里高岡郡江山之際蒸發年久矣實文二年壬寅冬我邦君四位侍從藤原忠義公在顯之於新殿則遂命也木鳩工開地拓基明年秋八月月中旬吉其成廿三日將行恒例之祭與於是前期一日泛彩鑿解籍纒群臣倍船相繼而登浦戶予亦辱榮從舟回隨所覽之景題辭詩若干編以述志。

卓午輕舟海港迎吟望秋夕漫長天自知風物逢迎意海神山青滿眼前。舟行未半里西風颯吹小艇可百艘力牽公船百千禮贊吧載公船如後如朝真一既之美觀也于感而賦之。

舟在拂面素秋風西去向閑銀浪申百大相牽如鳥疾嗚者人力副天工。此日晴時至于宇佐翌廿三日登鳴無舟程二里許其向江山之業行村鳩之幽遠奇樹奇石千態萬景固非一時短筆之所悉記所謂土佐入江船遠是也神廟在孤絕之処既而邦君謁廟前群臣羅列

其後祭儀利成至聖僧侶及預祭官之輩者皆有恩賜而後土人謠躍見者解頰

邦君重開鳴無廟神德洋洋衆祀欽而岸首枚枚壯况一江白水照幽深巫人鬻袖妓媿舞僕豎橫刀隔躍吟頰有陪觀終日衆有吟萬歲太平音

及暮回宇佐土人聚松明而迎公船教里之間恰如白晝廿四日於宇佐決有土人舟子相模之戲中葉角觥之戲蓋是也於本朝則世仁而時監賜予當麻路遠野鬼宿杯矣初曾後社僧携末一小匣伺於予僑寓于請而見焉其背有數百字嘉祿年中僧云仁之所記也但文辭鄙俚字面因奉祭神在與藥之本末則猶有可考者也修飾之而記于此曰昔淡路樂平室守三年已亥此神像自一宮流末於此旭自尔以來每歲七月三日之祭便必衆神輿於船而至旅所故土俗傳稱御船遊此時未聞廟社完修至四百三十五年後鳥羽院建久五年甲寅八月十日成成泰私內越智真光奏宮室殿始有神樂舞踏之儀式其御船遊之神使送川氏也又至七年土御門院正治二年甲申八月僧相祐再興焉厥後三十三年後堀川院嘉祿二年丙戌二月十日乙未未時室殿災不知神像之所在十八日得諸林木灰燼之間其長二寸余時依宮神殿夏五月伏僧教仁受神託九日安置其像於飯廟此絲恭者神主奏光守伏僧教仁入瞻宮伏僧玄仁神方俗定貫泰守光大中臣真國大中臣真久越智回郎等也云云自此至後小松院至德四年乙亥為詳載棟深之文其後二百七十七年之間無徵與之聞今邦君奉信旧規更極崇思矣夫一宮神者世教味鉅高夜根命之靈乎固可崇敬之神也邦君此舉豈不美哉明廿五日公船渡青龍寺予與一僧先渡登燈至佛堂榜曰青龍寺首空海闢此而并書之傳聞中國天台山之青龍寺准並土之靈鷲山空海入唐受法惠果所嘗目擊之地也此山亦以似於彼而名之故僧又謂予曰此地地結山一郡之勝如何不往覽之遂相伴登半嶺數百步而至焉奇觀聞說在亭嶺佳友相携登覽深滄海如天天似海一時法盡忘中心此日寺僧為邦君設酒饌宴遊藉久暝時回宇佐又於決涯長年三老謠躍翌廿六日回都下

舟舳群獲群獲、隈疑夜声中意路用船、船君臣魚水契年々、無事要重重未未、  
 右鳴無倍行之口占未及改正之一日以違君聽而漫備高莫且蒙藏諸鳴無社中回群謝不能遂標  
 而亦尊余者也是歲秋九月某日謹跋

此の再興に当り御寄進の品々次の如し。

- 一 鞍馬 二枚
  - 一 歌仙三十六枚
  - 一 釣燈籠
  - 一 全上
  - 一 石罌
  - 一 鶏口
  - 一 花籠
  - 一 太鼓
  - 一 御神酒錫(御紋付)
  - 一 駒犬
  - 一 石燈籠
  - 一 全上
  - 一 寺建五
  - 一 錫切立
- 深尾帶刀  
 百々刑部  
 生駒木工  
 村田玄壽  
 尾寄采女、波谷権左門、早寄小傳次  
 大塚伊左門  
 松田五郎大夫  
 竹島三右門  
 大黒次左門  
 深井甚左門  
 寺村淡路  
 山内下総  
 寺村藤五郎  
 横田助石門

山内丁代藩主神社仏閣に参詣せらるゝ數十百回なるを知らず。然して寛文二年並に三年兩

年に於ける忠義公の鳴無参詣の如く、その儀式参詣の盛大なる未だ曾てあらざる所なり。  
 祭神由緒の悠久にして其の神徳の尊きにあらざして何ぞ此に至らんや。

第二節 出見神社并花山天皇に関する傳説

出見神社は浦ノ内村出見にあり。社格は無格社なるも、御祭神は花山天皇なり。祭日は四月八日及八月八日なり。  
 社の入口右側に「不入」と称する所あり。竹木繁茂し古來人の入るを禁ず。傳へて曰く、これ花山天皇の御陵にして、天皇御在世の御幼穉子を御寵愛ありしが御懷妊にしてみまかり給ふれば天皇いたく歎かせ給ひ、遂に落御して帝位を下り給ひ、御冥福の爲諸國の靈場を御巡回あり、此の地子光院(社の厄方)にあり。今靈寺となり護摩堂のみ残れり。に留り給ふし不、空算四十一を以て崩じ給ふ。今に「不入」と称する所は即ちその御陵なりと。尤之に關する口碑及文献の在るものを摘載せん。

一 壬川家所藏記録による口碑

壬川家は攝津兄公より出で世に山城國出雲の壬川に住し居るを以て氏とす。其惣兵衛(其矢子ともあり)と云ふ者、花山天皇に仕へ天皇御讓位御落御の後土佐國高岡郡浦ノ内村へ御潛幸あり。其の節御供仕へ来る。当時大和の旧友より壬川氏に和歌の贈答あり。其の歌に

都より玉川水の流氷行きて

よるべき身をあげ氷とぞみる。

と申し来り玉川氏に氷に和して  
あはれともいふまふか  
おろみなる  
土佐の入江の藻隠れにあり。

と破みかせせしと云ふ。

寛政五年二月八日花山帝浦ノ内村出見千老院にて崩御。同寺の側は御陵を築き奉り御位牌は花山院太上法皇尊傍と記す云々。

興惣矢ノ花山帝の御衣蜀紅錦を拜領し居るを以て裏は唐木綿を付けて幅五尺、長さ六尺の打敷に仕立て有御菩提として播磨の同書山に藪の畧く、其の後五百余年を至て玉川甚右ノ門書山に詣て右の錦を拜見せりと。其の後代々浦ノ内より高岡他川幡号毎に浪々漂泊して数代の年曆世代都て相知れず。

(當主正晴氏は十三代の後裔にして現に神戸市に在住し三宮警察署に勤務せり)

(一) 御 届 書 (明治八年豫に提出せるもの)

花山院法皇御陵聖牌御届之事

第十六区第四小区浦ノ内村出見

一 花山院法皇御聖牌御陵

右者此度委詳詮候在矣殿別冊之通ニ御座候間此段御届在候也

明治八年七月十四日

戸 長 岡 道 清

副 区 長 田 宮 保 真  
区 長 松 下 綱 武

高知縣権令岩崎長武殿

(別冊)

花山院法皇御陵并皇太后御廟御旧跡申傳之吏

高知縣管下第十六区第四小区浦ノ内村出見

一 花山院法皇御陵

浦之内村出見春日谷春日馬場向往還ヨリ細キ谷川ヲ隔テ地凡ニ畝斗之林有。草木生ヒ繁リ林中專ラ藤号シ。御印不見。古昔ヨリ右近邊池近橋有リ。桜ハ六七十年前枯木ニ相成今小キ桜有リ。橋存ス。

谷ヲ隔テ往還ニ跨リ羊々家ヲ生スレ夫取衰ナシ。竹木木葉ニ至迄取事ヲ禁ス。御陵ノ近辺ニ田畑有リ。農夫誤テ草木ヲ傷メ候時ハ即所禁ヲ成ス。故ニ村民惶怖シテ草木ヲ取衰ナシ。諸人尊敬シ参詣人此節増々号シ。御成徳日ニ盛大ニ御座候。

一 皇 后 御 廟

但花山院陵西北山ノ根少シ高所自然石之石牌有。往古ヨリ皇太后御廟ト申傳。並ツク者ナシ。御位牌無之。落書ニ相成申候。

一 花 山 院 法 皇 御 位 牌

今上皇帝花山院大居士 (仁王六十五代御門蘆弘五載戊申二月八日四十一而崩)

新位牌 (高松天守厨子ニ入)

花山院太上法皇尊儀

裏書曰

神武天皇六十五代帝。諱師貞。父大王諱惠平。冷泉院第一王子。母贈皇太后藤原懷子。畏政太政大臣御尹女也。安和元年戊辰中誕生。永觀二年甲申歲十月十日即位。寬和元年在乙酉治天下ニ終也。寬和ニ丙戌六月廿二日即位。於花山寺祝髮。法諱入覺。同年七月廿三日播州赴普賢山。性空師承延ニ成子性空建書寫山円教寺。去年初辛春日社。寬弘五戊申年二月八日。壽四十一載崩。

厨子麻友記

妻子珍室女王依臨命終時不隨者。唯戒及不放遠。今世後世為伴侶。

同右ニ記

是曰已通命亦隨寂如少水魚。斯有句樂。大眾當勤精進如救頭然但念無常甚勿放逸。

同裏書

土陽高岡郡浦之内出見村千光院者古未雖有太上法皇尊牌而記跡不分明。當時在持秀惠法印慈之。將修補之。因循矣。

予稱彼信心。幸藤柳有信若松平三郎兵衛元久者。予令彼修造塗於尊牌。又造厨司安置尊牌了也。從寬弘五戊申二月。入費六百九十四年当元祿四年未仲春八日龜湖山下梅泉菴比丘繼耀記之。(右尊牌千光院齋寺後重村青蓮寺ニ奉納)

一 氏神 四社

春日神社

古奈良ヨリ

鳴滝八幡宮

京都鳴滝八幡宮ヨリ

熊野神社

熊野ヨリ

市宮神社

不詳

右花山院殿御在也之節為四方因メノ御勸請ト有ル

一 春日山阿弥陀寺千光院(真言宗青蓮寺末)

開基弘法大師

本尊阿彌陀

先達而齋寺ニ相成只今果所ニ成ル

花山院殿皇居之寺ニ御座候

一 千光院寺外ニヘツイ、ミタライト言所有。ミタライノ水ヲ以テ法皇初テ御飯ヲ御饗被為遊候。跡今ニ有リ。

一 出見ニ御着岸之節御和ヲ御饗被為遊候楠大木今ニ有リ。

一 御陵ノ南ノ峯ニ松有リ。法皇松ニ月之掛ヲ歡覽有リ。名付月見ノ松ト言フ。十ヶ年前切

仕成ニ相成今ハ無シ。

一 千光院東南ニ当海辺ニ香山ニ松生立有リ。頗景也也。山上ニ平地有リ。御休所ト言フ所

也。法皇山上ニ登リ常ニ御幸有リ。帝都ヲ歡覽被為遊候跡今ニ有リ。法皇時々出御被為

在候ニ付村名ヲ出見ト御名付被遊候ニ付今ニ出見ニ御座候

一 着御ノ地ヨリ海辺ヲ西ニ繞キ人家拾ハキ在所有り是ヲ蓋屋ト言。法皇出御之節蓋ヲ為御

燒有リ。名付蓋屋ト言。蓋蓋麻布宮神社ノ境内ニ三ヶ所有リ。

其 他 の 文 献

三

人類聚土佐故事卷十(寺院ノ部)の一節

千光院

春日山阿弥陀寺

在同郡浦ノ内村。

青竜寺 末寺

口浦村寺領石。

本尊 阿弥陀

慈覺大師作 傳云開基者私法大師也。

或書云大師被鎔山草創之時依處近邑暫留滯於此所。而致彫刻殊陀千鉢。至五百躬無勤行之閑暇。而予能滿千鉢。故亦從仙像於梓以代髮五百枚寫之。每木能背鑿二穴。納其彫影一枚。以代千鉢。即鉢千鉢佛矣。其後惠心僧都末此之地。而亦加刻木像五百。都千鉢全具矣。故阿作之證以鑿穴有無分之云。境内望寺豐跡千鉢佛。花山法皇陵。

土陽誌附録の一節

土陽誌附録の一節曰く

浦ノ内出見村千光院阿弥陀寺ニ花山院ノ御位牌有リ薄板ヲ以テ作之。里人云昔千光院火災ノ為メ院ノ御位牌等悉滅ス。今有ル所ノ御位牌ハ後ニ作之ト云フ。見分スル所モ然也。亦寺前ニ御廟ノ跡有。草木繁クテ墓所ノ形ハ無シ。土民云テ結ヒテ人馬ノ往來ヲ止メ。茅茨モ剪ル事ヲ禁ズ。此所當國ニ遷幸ノ事何レノ書ニモ不見。若シ花山院家志ノ子孫ヲ天子ト傳説ニ歟。

去レ共彼子孫モ此國ニ下向ノ事未決ナリ。又花山院法皇ハ仏法ニ傾カセ給ヒテ所々ノ聖地御料廻ノ御志深ク在坐テ紀州郡智ヘテ御幸成ラセ給フ。彼千光院ハ私法惠信兩僧千鉢ノ殊陀ヲ刻ミ安置ス。彼佛像概覽ノ為メ此國ヘモ渡ラセ給ヒテ送修ノ御意ヲ築カセ給フカト云フ。中曰各

南路志の一節

南路志ニ云ハ文字不用の箇所あり原文の終記す。嘉備集曰寄一詠於太平曰。云々  
此歌を爲玄御の贈答の歌とするは何によりて云へるにやおほつかなし。土佐軍記には一ノ宮親王の御贈答と書たれどこれも誤なり。さてこの歌はつきまつ一つの考あり。  
高岡郡浦ノ内出見村千光院の境内に  
花山院の御陵といふあり。そこを御皇といひていさゝか林あり。按に  
花山院天皇當國に崩御の事由なし。もとより傳來の誤なるべし。合考るにこれ  
後村上天皇の皇子玉川ノ宮長慶院實成親王の御手なるべきにやおほふよしあり。  
玉川ノ宮は何國に崩御ましノけることさだかならざれども天孫の亂に  
後醍醐天皇の皇子一ノ宮尊良親王此國に流され給ひ。同じ御子花園宮も此國に落させ玉ふ  
けられ。又玉川宮も此國に下り玉ひけんことよしなきにあらざるうへ土佐軍記ハ元親國迎  
之事の條云幡多郎入野に出玉ひ此處に老人はなきかと尋玉へば八十歳斗の老翁御前に伺  
公する。元親仰けるは。いほしへ元孫の時分この所へ一宮流され在玉ふ其旧跡は何くにか  
あると伺玉へば。老人乘ておれに是ゆる高き松の本にやかたを建て在玉ふ。其所はむかし  
より蘇州にありて恐水て近くものなし。一宮こゝろばそく思召此處に武士はなきかと御  
尋ありければ。是より二里ばかり南に太平と申武士おはしますと申ければ。此人をたのみ  
はと一首の歌をおくらせ玉ふ。

玉川ノ水ノ流来て  
よるべなき身を哀とそ見よ。

太平かへし。

哀ともいひかてあふんおよぶなき

土佐の入江のゆきくれにぬて。

かよふによみかへし玉ふと集る、と申ければ、元親阿玉にて、習志に詢下の岡を馳すとは是ならんと思はれまひて、老人に引出物して阿豊へ帰らせ玉ふける、と見へたり。玉川や云々の御歌一宮親王といへるは傳来の誤りて、玉川の宮此國に下り玉ひて詠み玉へる御歌なるべし、とこそおほゆれ。

さらば玉川や御の水といふこと無用の詞となりて聞とりたなきをや。かくて又大平氏は此々高岡郡の領主にて蓮池に在城しければ、鶴多郡入野村より二里ばかり南の方口大平と申武士ありといふも誤りなり。入野より足そ三十里東の方に蓮池城は有なり。また土佐の入江は浦ノ内三里の入江をいふ。

御談といふも浦ノ内千光院にあれば彼是よしあり。此の浦ノ内より二里ばかり北の方に蓮池城あれば玉川宮浦ノ内におはしまして大平に御歌賜ふしなるべし。

また長慶院を玉川の宮と申す、諸門跡譜に尊聖大僧正玉川宮男後醍醐院曾孫とあり。中畧居し玉へる故玉川の宮と申す、諸門跡譜に尊聖大僧正玉川宮男後醍醐院曾孫とあり。中畧長慶院譜は寛成後龜山帝御同腹の御弟也。正平二十三年東宮に立給ふ、天授之末舞して太上天皇と称せられ給ふ。後紀州玉川之山中に簞居し玉へる故玉川の宮とも号せり。

和歌を好まされ給ふ。御母後嘉喜門院とよみかわし玉へる御歌の花園宮云々亦玉川や云々の御歌を土陽徳勝録にも尊良親王の御こととし高岡郡津野山郷大庄屋玉川善右衛門次家譜には遠祖玉川与惣兵衛の旧友の贈答として露筒集にもゆし、冷泉為玄御此國に下り玉ひて大平とよみかわし給ふしなど見へたれど、みな傳来の誤とおぼへければ、爰にはのせ

す。今上左軍記取用ゆるものは著速のふるさによれり。さて玉川宮の御墓を花山天皇御陵と誤来よしせいぬなる事におもほへず。宮地中枝云。

寛成親王一度東宮に立玉ひ御辞退の後太上天皇と称せられ給ふし御等なれば其北に寛成天皇と花山天皇と誤しことは則寛成天皇を誤り傳へたる。朝又は後世をまさみしをゆのありて寛成と云天皇はなしそれは必花山天皇なり、などよくも考わたりさずして定めおきしに

土陽魂ノ記の一節

浦内古跡。口浦の内出見の浦千光院阿弥陀寺に花山院の御住牌有。「今上皇弟花山院大居士裏人王六十一代御門」とあり。寺の前に御子の跡有。草木繁茂して墓所の形は無し。土民垣を結て入馬の往來を止め茅茨を剪断を禁ず。往古より彼寺に寄附する所の田地有。今に至り替らず。云々

土佐國測岳志云

花山法皇の御陵は高岡郡浦ノ内出見村千光院阿弥陀寺と云ふ真言宗の寺に有り。寺に法皇の尊牌を造立して「花山院太上法皇尊儀妻子珍室云々」とあり。按ずるに花山法皇土佐國御下向崩御のこと自何れの記録にもみえず。或人曰。花山法皇佛法に精敏し玉ふによりて御在位の御時日本六十六ヶ國へ一所づつ送修の爲に経塚を造らせらるゝと云ふ。定めて、御陵なるべしと云ふ。又或説に往昔花山院殿と云ふ公家當國へ詔諭ありて此地にて薨去。其人の墓なるを

後未あやまりて花山法皇の陵と覺たりと云ふ。  
里人云。昔千光院に火災ありて院の御位牌等悉く焼失す。今在竹の御位牌は後に之を作る  
。と云へり。見分する所もしかなり。

6. 韓川筆誌云

高岡郡浦の内千光寺と云へる寺は花山院の御陵あり。院順礼の時これにいらり給ふ。

「土佐の海に身は藻の流れ来て

よるべなきさばあはれとも見よ」

と遊ばして、其後朝御まじしと云ふ傳ふ。此歌は中務宮有井庄司へ遣はされたる云  
々。

7. 土佐國編年記事畧云

土陽志附録と云ふものに、高岡郡浦ノ内出見村千光院阿弥陀寺に花山院の御位牌と云ふもの有。薄板を以て作之。里人云。昔千光院火災の時、院の御位牌等悉く滅す。今有所の御位牌は後に作之と云へり。見分する所も然也。又寺前に御廟の跡あり。草木繁りて墓所の形はなし。土民垣を結て、人馬の往来を止め、菜蔬を剪る事を禁ず。又此所を出見と名付ることに花山院の口時天気をなまらずして、柳の空も御まつかしく滋度も御門の外へ出御な  
りしかば、出見と名付。又塩屋の浦、御休所すと云所もありと云。  
さてこれに在ますほど大平某が許へ

「土佐の海に身はうき草のやう水きて

よるべなき身も哀れとも見よ」

大平御返し

「あはれともいふであふがむ教なりぬ

身はうき草の藻がくれにぬて」

一口は

「あはれとはいふにあふむ及ぶなき

身は入海の藻がくれにぬて」

に依る。つるに此処にて崩れ給ふ。

四國編年道指南と云ふものに云へり。此贈答御歌或は一條殿との贈答とし、又一宮尊良親王と大平某との争となし、又冷泉殿と大平との争とし、歌といさゝかづゝの違はあれども、もとの同じ歌を誤りしものなるべし。津野山御香頭大庄屋玉川善右衛門が家は元は浦の内より出で、其先祖玉川与兵衛と云者は、大和國玉川郷の産にて、花山院に仕へ奉り、院当國に渡御の時附奉りて下りしと云。はじめ阿波村に居給ふとき、大和の旧友より和歌を寄て云。

みやこより玉川水の流れ行きて

よるべなきみをあはれとぞみる。

玉川氏和して

あはれと云ふもなみくをろみなる

工紙の入江のものがくれぬて。

とよみ交せしと云。此歌正説に似たり。上の歌どもは皆此の歌を誤しものなるべし。さて其の玉川の家には花山院より奔領せしと云物とも昔は考く持ちしとぞ。此家には付て之を考ふるに花山院と云傳ふは、花山院に於て、花山院法皇の事にはおはしませず。又大

和國玉川と云事也。紀伊國の玉川を誤しなるべし。然思ふよしは、摘檢波が花さく松と云  
るものには、長慶院紀州玉川の山中に籠居し給へる故、玉川の宮と號す。諸門跡譜と尊聖大  
僧正南方玉川宮の男後醍醐院曾孫と有。また檢校保正一語にも花山院權大納言長親御は長  
慶院の御舅にて入道し給ひては明徳とも耕雲とも号する。耕雲口傳與書に此一番は南  
禪寺禪院耕雲魏口上人とあり。南禪寺禪院にもあはせしと見ゆ。と云水うに依て考ふ  
水は、此墓御在牌まじも、この長親御の御子等の中か、又は玉川の宮をたしな稱し奉りてお  
はせし御事の類なるべし。

(註曰藤原家忠花山院と稱し其子孫亦花山院と稱す長親は家忠の子なり)

一書云

上畧。花山天皇此の國にて崩御の事さらによしなき事也。もとより傳來の誤なるべし。  
平道云云けるは

五川や都の水の流れ来て

とあるならは後村上御子玉川の宮長慶院寛成親王の御事なるべきかと思はる。玉川の宮は  
何國に崩御まし、くける事さななるべしと云へども元弘の乱に後醍醐天皇の皇子一の宮親  
王本國に流され給ひしに、同じく皇子花園の宮にもこの國に落させ給ひぬれば、玉川の宮  
はもとより、此の國に下りまし、にこそ。花園の宮のこの國におはしまし、ことは、依伯  
本仙が施す。る曆元三年正月廿八日堅田小三郎經貞と云ひし人の文書に見えたり。もしし  
かりば玉川の宮浦の内におはしして古に高岡郡の領主たりし大平某が蓮池に在城しける  
かもとへつか付さるゝならむか。蓮池城は浦の内より二里ばかり北の方にあり。さて其の  
歌を答へ奉りて大平が土佐の入江と謗みたるならんとおもへばかたぐよくある事なり。

土佐の入江は即ち浦の内三里の向の入江をいへばなり。斯くて長慶院を玉川の宮と申せし  
ことは高氏の花咲松白長慶院いみ名は寛成後龜山帝御同腹の御弟にまします。正平二十三  
年東宮に立せ給ふ天授の未詳して太上天皇と稱へら水給ひき。その後紀州玉川の山中に籠  
居し給へるが故に玉川の宮と号せり。歌を好ませ給へるにより、御母後嘉善門院とよみか  
はせ給へることかの御集に見えたり。云々とあり。  
かくて遂に玉川の宮浦の内にて崩御まし、くしに山陵つかへ奉りしを後々やうく傳へ誤  
りて花山天皇とは申せるはこそあらめ云々。

一書云

花山天皇の陵は千光院門前にはあり。三十坪許りの地也。古昔は墳墓の形有りと。今は竹木  
繁茂し墳墓の形なし。石碑古は石墳上に有りしと云傳ふれども年を経る事久しけれは深く  
墓土に埋没せしや。亦存せず。古老傳へ云。天皇此地へ行幸有りし時初めて御飲を炊き  
たる所なりとて、今にへツイと云地あり。又今田中にへツイの池と云ふ小池あり。又云  
地に藤樹多しまた右近の橋とて古木あり。しに今桜木枯れたりと。云々。

なまきあとのせにはふれとよ上ふとの  
形は我る花の山寺

依伯本仙所藏古文書写

堅田小三郎經貞申事。去年曆元十二月三日奉屬于御手押寄大高坂城於南大手櫓向矢倉  
連日致軍忠之怨今月二十四日為後攻花園宮新田綱打入道殿金又右近將監土佐權守近藤四郎  
左門尉和食藤四郎有井又三郎河間右門二郎依河四郎右門入道度賀野又太郎入道大野



中村名主庄官以下凶徒等率数千騎等未取陣於湖山之間同廿五日奉駕御手致敵々合戰敵千人  
誅伐之時近藤四郎左衛門尉若定茂野孫九郎介取仕畢此等次第守獲御手一円三郎次郎曾我兵  
一同廻合戰之間令君和上君為後証可賜御判候哉以此旨可有御披露候恐惶謹言

曆心三年正月廿八日

依 伯 經 貞

進上御奉行所 兼り

(四) 結 論

以上の口碑に文献より見るに此の「不入」と称する所は

一 花山天皇の御陵なりと称するもの。

二 花山天皇逆修の爲造らせ給へる経塚の類なるべしと称するもの

三 花山院と称する公卿の一族の者の墓なるべしと称するもの

四 長慶天皇の御陵なりと称するもの

以上の四となす。今少しく之れに關して考ふるに

花山天皇の御陵なりと称する説は里人の數百年前より傳へ来りし所なるに其根據極めて薄弱  
なり。何と云水は花山天皇が土佐に下り給ふ事如何なる文献にも見えず。殊に其の御陵は京  
都市衣笠北道町の新屋川上陵なる事は明なる事實にして毫も疑ふ余地なし。  
次に花山天皇逆修の爲造らせ至へる経塚の類なるべしとする説は稍首肯し得らるるものあり

り。

何と云水は花山天皇は女御惟子の早生を歎かせ給ふ御出遊はされその冥福を祈らせ給ひし御  
事を水は當所には千光院の如き聖場もあ水は逆修の爲の経塚の類を造らせ給へることあり得  
べき御事なり。殊に天皇の御信任ありかりし世空上人が當國に來り北原村に寺院を建立せる  
事實等より見るも当地に経塚を營ませ給ひし事げにもと首肯せらるるふしあり。玉川典徳兵  
イが当地に來りしが如き御冥福を祈らんがためにあらざるか。

次に花山院と稱する公卿の一族の墓なるべしとする説は容易に賛意を表し難し。何と云水は  
花山院と稱する公卿は花山院家忠の子孫なるべきと彼が子孫の此の國に來れる事又何れの  
書にも見えず。

最後に長慶院の御陵なるべしと稱する説につき考ふるに南水朝の頃後醍醐天皇の第一の皇子  
尊良親王が播磨野村に下らせ給ふ。又第八皇子花園の宮が瀬江に來らせ給ひて大高坂松  
王丸の軍を援けんと計らせ給ひし事あり。されば後村上天皇の皇子寛成親王即ち長慶天皇が  
此の國に來らせ給へる事或は有り得べき御事とも思はるるにこれに關しては何等よるべき正  
史を。只南路志に記せる如く

玉川 水 都 の 水 の 流 れ 未 て  
よる べ き 身 を 哀 と ぞ 見 よ

と云ふ歌は長慶院が大平氏に送り給ひし御歌なりとすれば、或は然るべしとも思はる。  
何と云水は長慶院は細州玉川の地に菴居し給へる事ありしに玉川の宮とも稱す。されば  
此の御歌は玉川の宮即長慶天皇が官軍御募りの爲に此の國に下向し給ひ、横峽三里の入江に  
着かせ給ひ、この地に御留り造らせ水程近き蓮池城主大平本もとへこの和歌を送らせ給ひ、

遂にこの地にて崩御遊されしものとすれば根なき事にもあらず。隄の御陵の令に定むるなりぬもかた人、此の説の強味なり。

尚此の御陵を花山天皇の御陵と稱するに至りしは長慶院は御諱は寛成と申せし本旨寛成を音にて読めばかんせしとなりかんとせし天皇よりみざん天皇と較じ誤りしにはあらざるか。

又長慶院の御算は花山院長親御を由らばかゝる所より花山天皇と誤りしにはあらざるかと思はる。されど前にも述べし如く、隄が此の國下向のこと何れの書にも見えぬ。且つ隄には亦

永元年八月一日嵯峨の大皇寺、長慶院にて崩御ましまし、との説もあれば、又佐下向のこと亦局に信ずべからず。従つてこの「不入」は長慶院の御陵なりとも令違は定め難し。

以上論ずる如く、この「不入」は對し確なる説定むべかりず。されど數百年の昔より此の地方にて故ある貴人の御墓なりと申し傳ふる所より見ゆるも、何れ故ある事なるべく思はるゝも

今輕々しく定むべきにもあらぬ。傳説は傳説として其終に保存し、其の真相は後の研究に俟つ事とせん。

第三節 神武天皇御東征土佐御通過説

神武天皇御東征御道筋は古来瀬戸内海なりとせるに對して、大槻如龜翁は先年御肇國史を著して其御道筋は瀬戸内海にあらざして土佐なりとして、其の理由を説明せられ、我が學界に一大衝動を興へたり。

翁の所説は未だ一般史家の承認する所とすらざるも荒唐無稽の説にあらざり、大に研究に値すべき節あり且つ本村と盛接の關係あるを以て茲に其の一節を掲載せん。

一 御肇國史

主篇第一 章 高千穂 至木國

我五瀬尊夜來野尊兄弟二柱高千穂乃宮尔御坐寸。一日兄尊曰波久道東方尔行天食國乃政斷看登思不。何地尔坐看乎登誤多未不。弟尊言天曰久。爾奈知東有美地青山四岡。其中木天磐舟未來天降未志志神御坐。謂爾知是神鏡遠日命氣御坐。其地波大合乃中心尔奈。伊看行天宮必對此神對。答多未不。皇弟諸臣皆言。理實灼然奈利。我等恒尔然念用。早可奉行。於此修舟。爾乃勉備矣食。加久天美々津典利船。我等恒尔然念用。早可奉行。未不。土人守佐津夜。守佐津夜二人守佐川上。一柱滿宮。依天大御靈。守佐津夜二人守佐川上。一柱滿宮。依天大御靈。守佐津夜二人守佐川上。一柱滿宮。依天大御靈。

美々津

日向國北部の大河なる耳川の海に其南岸立若神社は神武天皇御腰掛石なり。毎年八月朔日御祭船の時に供せし遺風として今も粗製の団子を其石に供ふ。云々。

宇佐

土佐國高岡郡宇佐村是也。此地は土州大海灣中央の小港にて浦之内と稱し現今水深十餘呎の舟泊地なり。土佐幽考は有宇佐八幡故為地名とあるれど八幡の號は佛教に於て最初日向國に在跡し其の豊前に移りしは欽明朝なり。されば當國の守佐は其以前よりの名なるを知るべし。又土佐國土記(後紀)吾川郡玉島或説曰神功皇后巡國之時、御船泊之。皇后下島休息。破際得一白石。因如鶴卵。皇后安于御堂。光明四出。皇后大喜。詔左右曰

是海神所賜白真珠也。故爲島名。とあり。是北神武神功の誤聞にて神武帝の北國に迷り  
せ給ひし御事蹟として此上も無き証左なり。此國土記の逸文こそ砂中の白玉。

按に日本紀に東征。古事紀に東行とあるは大陽崇禰の南系氏族の特性を有るは既に云ひき。然  
るに兩書は差次に御祭船より北行して瀬戸内海に入り又西行し豊國守佐に到ると。次第したる  
は前後矛盾といふべし。畢竟する古語傳へたるは守佐とのみなりしを後の修史者太直に豊  
前の守佐とし或は筑紫の守佐島ならんと各自に想定めて、方位などには意も留めざりしならん  
。故に其次に安藝の地名あるを山陽道安藝國とし又遠明門と紀には豊後佐賀國の如く、記にて  
は明石瀬戸の如し。東征東行と記しを女ら其筆路を過らぬしこそうたてき。

おのれ如龜上古史を讀む毎に、守佐を豊前又は筑前とするは東征の御本意に悖る者と疑ひなご  
ら、日向より四國の山を望むべき大西やとの疑ひをも抱く。日州の人は逢へ生向ふ、宮寄へ往  
きし友に逢へば尋ねたれど、明谷せし者なし。いふく自檢に若みすと。乙卯四月其地を踏み  
、宮寄神宮を拜し、田中宮司に質したれば、海峽なる末社の社掌某を呼ぶ此事に及ぶ。曰く平  
生さやうなる事に氣も留めず。有無共に申すべき無し。さ水じ篤と思ひ是れは、秋天の登み巨  
りたる時、海上を見渡すに東北に雲ならぬ翠色の眼に入りし事もありし縁なる氣持もあり、と  
若りき。當國の地理家三浦氏面会し問答なして、神武帝の御事蹟は國內処々に其遺跡多し。然  
共皆耳川以南に在りて河北には一事も傳へず。  
美々津里人いふ。神武様の御祭船は此津よりなりと。此津は宮寄の北十余里にて土州の山も遠  
に見ゆ。その北年末の疑團も一時に晴れ、漢詩一首を口すさむ。  
美々津頭眺海流、神皇此地定神籌。舟師東指何迎去、雲抹青嵐是土州。

日向洋の海流は上にも云ひしが如く沖ゆくものは紀州沙州にて西分し、又其地方を流れ行くも  
のは土州の大湾を西に環りて元に還るとぞ。そすれば御祭船の針路は地方の海流に乘り東に向  
ふ土佐の守佐に到られしを証すべし。

其地手前岡水門、木遷利又安藝國木至利多祈理宮、亦其國手前上幸天粟國木入多末也、  
行宮、手造利高島宮登鉢、三年坐天舟、檣糧食設備志年。一、中州手前平豊、欲世利。

岡水門  
土佐國長岡郡是存り此國の海岸は天武紀に見ゆる如く地爰あるは水門の所在未詳なれと  
、物部川の海に在るべし。紀記共に筑紫岡水門とあるは筑紫に遠賀郡あれば上の守佐と  
同じく後より押当たる誤記なり。此時代に舟して穴門を潜るべしやせ、且其方法も違へ  
り。

安藝  
同國安藝郡にて國の東南隅なり。神名式なる多氣神社は嶽明神とて奈牟利村鎮座多祈理  
宮の趾も其地なるべし。理は添字にて紀に塚宮とあるは嶽の誤字なり。

粟國  
紀記共に吉備國守改云。是れ粟と黍と同じ穀物より誤れるか。イナ誤記にはあらで安藝  
國とせしより其次なるは吉備にて河波にあらすと故意に改めしと覺ゆ。

高島宮  
按に河波、吉備を混誤せし傍証を挙げん。云々。  
河波國那賀郡橋浦の灣頭に立てる高島其地なり。安藝の多祈理宮より海岸づらに陸行し  
て當國の海部に入り、所謂八坂八茨をど越えて東端なる浦生田岬に至り、海水を隔て東

方の高山連峰（紀伊）を望み給はゞ、土夜の山を見わたり給ふよりも猶近し。彼山の形  
なほこそ、聞きし青山四圍の美地ならめ、との御感は一入深くましまさん。  
然者一挙して大功を奏せんものごと、此島に宮居せさせ給ひ、兵船を修理し糧食を貯備  
せられしは宜なりと奉思に存ん。此宮に居たまひし歳月を紀には三年とし、記には八年  
とす。兵食設備のため長日月を送らせ給ひしげしるし、今は日本紀に因りて三年とす。

一 拳

ヒタオシと訓むべし。ヒタは一の紐なり。  
丁丑三月おのれ阿波國に赴き、津の峯に墮り、橋浦の内外を一遊したり。此國も古今歳  
目の異ありとし云へば、地形に多少の變動は免れざらんも、大勢は異ならざるべし。  
紀州の山は十里の外に蜿蜒たり。眼下は蒲生田岬東に突出し、岬外に伊島あり。以南は  
大平洋にて岬より北に亘りて大灣を推す。即橋浦大小數十の島岬散布す。奥州松島に擬  
して阿波松島の形あり。岸に沿ひて小勝島稍大なり。灣の中央に立ちて外海を隔るも  
の高島にて、そのみ高からず。人家一戸あり。清泉湧出づ。泊舟の飲料は皆此水を服用  
おるといふ。人居は水に依る。宮墟其辺をるべし。詩亦一首あり。

討古南阿津乃峯。春寒橋浦一灣風。黃泉久被黃薇誤。誰省千秋高島宮。  
此時天富命遠天肥饒地求也。大麻夜木粟麻敷于殖也。粟。漢糧食也。麻敷。漢織布也。志  
年。又海人部乎定免也。兼種々物乎。謂古史年。大麻夜乃後商政。阿波。辰部。登志。天麻植郡之。居耶  
登志利。大昔祭而年木。又木。麻。布。手。賦。那。海部。毛。同。文。觀。石。葉。等。真。上。自。是。古。利。奈。利。皇。師  
東木涉天曲浦水至。一。漢人。架。船。天。為。釣。來。利。左右。林。波。上。亦。涼。曾。波。何。者。載。登。向。多。未。此。天。日  
別命志天見志年。復命。天。白。久。是。有。人。耳。登。喚。招。天。汝。者。誰。登。向。多。未。不。答。白。才。僕。者。國。神。名。

珍夜。天神子來。豐聞。天奉迎。本古曾。又向多未不。汝者。知海道手登。悉木海陸乃道乎。識用登  
答白才。又向多未不。汝典為我尊耶登。奉仕。年登白才。師漁人木橋乎。授天御船木。率入海導者  
登志天名字。根津夜登。賜不。

曲 浦

ワタノウラ紀伊國名草郡和歌浦其遺跡にて名草山の北麓和田村が其本居存る。云々。  
時水日鏡日矛乎天道根命木後賜天美地乎。是。天宮造利奉齋登。日多未不。此二種乃神宮。波國懸日  
前大神奈利。  
可久安利天皇。船波速吸乃門。手利。船。相。按。天。匯。波。奇。不。到。多。未。不。時。志。志。奔。潮。乃。太。急。木。會。以。婆  
浪速乃國登。魂。亦。浪。華。登。手。曰。不。合。謂。難。波。訖。訖。奈。利。

速 吸 門

加太瀬戸なり。此海峡は紀伊國と淡路島との中間に友島雙立して、三口あり。西口尤玄  
し由良瀬戸と稱し。現時神戶大阪の航路なり。云々。  
按に日本紀は日向より豊前に至る間に速吸門あり、故に豊後水道を扼する佐賀岡とし、  
其他に早吸日女神社もあれば、曾て異説を聞かす。然共古事記には速吸門を吉備の次に  
記す藤戸の渡太明石瀬戸也。二書の相違も畢竟する守佐條下に云ひし如く最初より方位  
地理を誤りたるに由りしなり。

匯 波

ヨヤミとよむべし。奇波の約なり。根津國住吉郡大羅郷にて大依羅神社鎮座云々。  
此國と阿波流。天白肩乃津水。冷多未不。皇師勤矣。天歩。年。龍。田。木。趣。志。年。其。路。狹。久。嶮。久。人。並。行  
不得。天。還。多。未。不。引。更。天。東。方。由。勝。駒。山。踰。中。州。水。入。古。年。登。徑。木。草。香。邑。木。至。未。才。

白 肩

シロカタとよむべし。河内國大縣郡其地なり。云々。

龍 田

大和國平群郡の地名にて名高き紅葉の名門なり。

鷹 駒 山

河和兩國境に亘る。小縣中央の高嶺にて大阪よりよく見ゆ。今は生駒山と書く。

草 香 邑

河内郡日下村。今は中河内郡日根市と称す。

二 所 見

之に依りて見る時は、神武天皇御東征の御道筋は瀬戸内海に非ずして、日向の美々津より、直ちに土佐の國に渡りせ給ふ。浦ノ内なる宇佐の御上陸、次いで御郡川の河口（備水門）に御泊船、更に安藝郡奈半利村多氣神社の地に御滞在。こ水より海岸傳ふに御東行あらせられ、阿波の國に入らせ給ひて、所謂八坂八坂等を越えさせられ、かくて全國那賀郡の橋浦の邊、頭なる高島に御駐在。此処にて兵船糧食の御準備口三年を費し給ふ、それより一路速吸の門たる紀淡海峡に至り、大坂湾に入り、淀川を溯りて白肩津に御上陸。孔舎衛坂の戦に皇兄五瀬命の傷ぎ給ふや、其の日に向ひて戦ふの不利なるを以て、道を転じて紀伊路に回籠し給ひて、遂に賊徒も平が給ひし事とせられり。

左に縣立図書館長中島嘉吉氏の

「神武天皇土佐御通過の傳説」なる文章を掲載せん。

三 中島嘉吉氏所説。

神武天皇が東征の軍を率ゐて日向國を御出飛せられたのが丁度二千六百年前の十月五日であります。凡ゆる行旅征戰の御苦難を嘗め玉ふ大年後に初期の大目的を達成し所謂青山四周の大和の疆界に御即位の大典を挙げられ、故に日本建國完成せられたのであります。さすれば当日は美に悠久なる日本建國史への巻途第一日とも謂ふべき意義深き記念日であるのであります。官書纂に於ては当日より盛大なる二千六百年の記念祭典が奉行せられ長くも藤文宮殿下には觀しくその聖蹟に御臨御あらせられたと云ふ事を耳にしよして俯仰敢て謂ふべからざる森嚴の氣に打たれるのであります。

天皇御乘船の地は就ては古來或多の説がありましたが今回愈々官書而から北十余里に在る美々津といふ海港に決定を見られたあります。昔より此地には天皇御乘船の傳説が残りまして毎年八月一日（古事記に依る）には家々に餅をついて神饗から人々が「起きよ／＼」と進呼して廻るの如き例になつて居る相であります。附近に天皇御發遣に際し隨伴して天神に武運の長久を禱り玉ふたといふ旧蹟もあり大年後に中つ國に君臨し玉ふや先づ鳥見山に聖跡を立て、皇祖天神に御奉告祭を行はれ玉ふに御事蹟と併せ稽へて天皇の御東征が決して一個の英雄的衝動に出で玉ふたものでなく一に天照大神の御遺訓を御遵奉したる天照御孫の神護であり、其のたゆみに大和民族の全運命を賭した尊嚴なる征途であつた事か首肯されるのであります。

天皇東征の御順路に就ては古來の文献悉く瀬戸内海を御通過せられたといふ事になつて居ります。然し何分御東征後千三百余年たつて初めて古事記、書紀が編纂されたので其間千余年間人の口から口へと語り継がれたもので傳説の誤りなしとは申されぬのであります。然し左

末此東征の順路に就ては何人も疑問を懐かざる者なきかたのでありました。所が大槻如電といふ篤学者は余程前から天皇の御通路は瀬戸内海をなすて土佐の沿岸をなすべしとぬといふ説を持つて居たのであります。多年研究に研究を重ねて昨年一月御肇國史四巻を出版して初めてこの説を世間に発表して学界に一つの波紋を投げたのであります。

翁の土佐通過説の根據はどこに在るかといへば古事記に東行、書紀に東征と書いてあります。が此の文字が非常に重要な文字であつて東に向ふと云ふ事は太陽崇拜の南方民族の本能とも謂ふべきものである。瀬戸内海といふ事は日行し更に西行して筑前に出るなどいふことになつて東征の意義を為さず。殊に旧曆十月五日といへば冬の半下氷風激しく豊後水直を北流するは容易の事ならざるべく泥んや馬関海峡を渡つて筑前へ出るなどいふことの出来る訳のものではないといふのであります。大体美々津港は土佐の暖地岬と略ぼ同緯度に在りまして土佐の沿岸を流うて居る所謂地方の黒潮に船を乗り入れたらば極めて自然にして平安な航海が出来る筈であります。所が美々津から果して土佐へ見えぬほどうか、若し見えぬならば最早や疑ふ餘地はないと考へて翁は自ら美々津へ参りまして港頭に立つて土佐を眺めた。所が驟然として土佐の山が見えたといふので翁は躍り上つて喜んで多年自分考へて居た土佐通過説が実證されたと申しました。一詩を詠じてその感想を漏らすのであります。

美々津頭望海流 神皇此地是神籌 舟師東指何処去 豊後嶺是土州。

古事記と日本書紀には御東征の年代や又実に懐かき事ありするが、美々津を御東指して浪速へ行かせる迄の御寄港地は大體に於て一致して居りまして第一の寄港地は豊前の守佐であり第二は筑前の向の水門（古事記には岡田宮）第三は安藝の筑宮であり第四は吉備の高島

の宮であります。如く其第一の御寄港地たる守佐に就いては古来單に守佐と語り傳へられたものを修史家が豊前の守佐と早合点して守佐の上は豊の国と云うと云いふ文字を挿入したのが抑も御順路を誤つた元であるとして居ります。既に土佐の守佐であるべきものを豊前の守佐と誤つたのであるから其の次の寄港地である向水門（紀）にしては岡田宮（記）にしては買那へ送持つてこそ行水門はなかりなかつたのであります。博学の宣長翁も向水門、岡田宮の所に在りば余程困つたと見えまして古事記傳を見ますと、「向水門は和名に筑前遠買那あり是か」といふ、岡田宮は向と一つにや別れ、岡田と云ふ地名、古書に見えず」と告白して居ります。大槻翁は何の必要があつて皇師皇々と馬関海峡を越え水はならぬか、其必要何処に在りや、又其事な可能なりやと筑前説をへ駁して居ります。又第三の安藝の筑宮にしましてもそんな地名は安藝の國にはないのであります。

神代紀に素戔鳴命が安藝の可波川上に到るといふ記事がありますが若し其可愛のことであるならば可愛の宮と書くべきでないかと宣長翁も申して居ります。古事記には多祈理宮となつて居るが書紀の筑宮（タケリノミヤ）の誤字であらうと云ふ説が有力でありますけれども其多祈理と云ふ地名も安藝の國には見当らぬのであります。

吉備の高島宮にしても備前、備中、備後とわけて其候補地は幾つもありましたけれども畢竟するに「其地定かならず」といふのが最後の結論であります。斯様を誤て是程頭着な神武天皇御東征の寄港地なり御駐蹕地な殆んど望をつかんだ様を暇味を撮り処のないものになつてしまつて居るのであります。是は瀬戸内海説を採るが故にさうなるのであつて若し土佐を御通過といふ事にすれば以上の御寄港地を極めて明瞭に指摘すべし得るのであります。一休神代

三世の神祇下ある日向の國と土佐とは一葦帶水を以て隔て、居りましたして東西相望む事か出来  
ます以上、その当時迄の兩國の間は交通のなり筈は全く幡彦郡などは当時その御統治の下に  
生つたのではないかと推測されるのであります。現に土佐には神代は關係を待つた数多の傳  
説が残つて居ります。例へば幡彦の伊弉諾には大畏大なる息女と云ふので、水ノスセリ  
尊が事代主命に御命じられたるを、漁獲せしめられた。所が余りに美事な氣であつたり、肉  
息と御名命遊ばさず、水に身をまかせ、今日詠つてシビと云つて居ると申します。又葦葦鷓尊が土  
佐へ御出になつたので、國守が松の緑葉を茂茂きにして辛い酒を飲つて御饗応申上げたので、其  
土地を「カヲシム、ムイ」と甲した相下あります。今の高岡郡の鳥の森であるといふ事であり、  
土佐洲岳志の中にも或書曰くとして、葦葦鷓尊が土佐に御住みになつて居られたので、天照大  
神の尊の器守調大にして、慧智俊敏なるを賞し玉ひ、止久左登勢と宣はれ、其が土佐の國名に  
転訛したのであると書いてあります。又高岡郡新居村杉尾といふ所に葦葦鷓尊の御神田と御  
井戸があるといふ事、土佐國考といふ本に出る居ります。土佐の幡彦の國道は諸國に率先し  
て既に葦葦の朝に置かれ、ありまして、其國道の天舞樂命を御神託に依つて任命したといふ  
ことが國道本紀に出る居ります。御神託に依つて國道を命ずるといふ文字は凡そこの國  
道任命にも嘗て出ない神祕的な文字でありまして、彼の井戸を玄敏と云ふ人の書いたもの、中に  
「土佐國にて御靈徳を蒙り生ひ立つもの諸國に勝りて秀でざるものなし」といふ言葉も  
唯の独りよがりのおお弁とのみは断定出来ぬと思ふのであります。こんな説であつて神代  
三世の同土佐の西端の幡彦郡地方は既にその統治の下にあつたので、思はれぬと云ふ地名は天孫人種には  
ありません。少くとも曰土の向相互の交通があり、往來があつて土佐といふ地名は天孫人種には  
既知の名称であり、親交され、土佐下あつたのでありませう。かういふ兩者の歴史的關係を

地理的の直接乃至は氣象潮流の好適を條件とみ、或は前申しました日向民族の向日本能といふ最  
なものから考察致しまして、神武天皇が其御東征の航路を土佐にとられたと云ふ事は暫く文献  
を離れて考ふれば決して突飛を考へ方なく、又必ずしも荒唐無稽の説と一蹴する事は出来ぬ  
かと思ふのであります。そこで如雷翁の説に依れば、美々津を御乗船になつて例の黒潮に  
乗つて東行し第一浦の内の宇佐に御上陸になつた。そこで國つ神守佐津彦、宇佐津姫が俄か  
作りの御慶を宇佐川畔に設けて天皇の御一行を敬待申上げて居ります。天皇は宇佐津姫を急  
臣天種子命に妻はし玉ひ其間に宇佐津臣が生れ、居る是が中臣氏の御先祖になつて居ります。  
吾川郡の玉島は神功皇后御巡國の時泊舟せられた由緒ある島であつて、皇后は此島に玉歩  
を移され、磯際にある岩より輝く薔華の穠香白石を御拾ひになつて之を掌上で愛玩せられた非常な  
御喜びになつて、是れ海神の賜ふ所の白真珠であると申され、其まゝ此島の名称とせられた  
といふ記事が土佐風土記遠文に載つて居ります。土陽誌附録には神功皇后が宝珠を御拾ひに  
なつた玉島は高岡郡浦の内の玉島であるといふ。其処には「今も玉貝多くして真珠を採り  
。されば由緒残るに似たりと書いてあります。如雷翁は此の玉島の傳説は神功皇后でなく  
神武天皇の誤りであり、天皇が土佐へ入りし玉島の何よりの証據は此風土記遠文こそ、神中  
王であるといひ居られます。

浦戸の御屋瀬浦が御屋瀬の転訛したもので、神功皇后御船を寄せられた暫し、茲に御滞在ありせら  
れ、石由緒よりみましの浦と云ふ傳説を如雷翁が知つて居たら、又必ず其水も神武天皇の誤りで  
天皇御末國の第二の証據だと善んだ事でありませう。宇佐を御出発になつて第二の寄港地は  
石崗水門（岡田宮）へ参つて居ります。其岡水門は果して何処であるかと云へば、翁も誤分こ  
水には苦吟をして居ります。夫木杪に水莖の岡の茨に立つ浪の深き底をば酌みて知るらんと

云ふ歌が載つて居ります。其註に岡の築は近江又河内或は讃岐、土佐とあります。其夫木抄にある土佐の岡の築は幡野郡に擬してあつて之を天皇御寄港の岡水門にすれば航路は逆転して不都合である。そこで如電翁は長岡郡なりと断言を下しました。然し何分天武天皇の白鳳年間には大地震があつて土佐の南岸は陥没して居るから其所在ははつきりと指摘は出来ぬが恐らく物部川の河口であらうと申して居ります。貫之泊舟の大湊の見当であります。

次は第三の寄港地たる安藝の多祈理宮は勿論山陽道の安藝ではなく土佐の安藝郡のことでありまして御駐蹕の多祈理宮の所在地は今奈半利に鎮座する多祈神社のある地であらうと申して居ります。多祈理の理は悉へ言葉で意味は全く名和の起名が名和利と転じたかと同様に多祈理と多氣とは全然同じ言葉であります。多氣神社は土佐廿一社の一つでありまして幾道から凡そ十七八町の北方に位し背ろは直に小丘を繞らし奈半利川が其西側を流れ一帯の平原を俯瞰して支配的地位に立ち環壕何となく神威びて規模宏大如何にもさうして宮跡としてふさふさい土地であります。古事記には茲に七年霜生あらせられたとあります。恐らく十二月一日から翌年三月六日迄御駐蹕にまつたといふ書紀の記事は正確な記載であります。

第四の御駐蹕地である吉備高島宮は勿論吉備下なくして阿波の隈りではありません。粟と黍とが同じ穀物である関係上両者を混同した例は古来沢山あります。瀬戸内海説を採つて前日御磯泊地を安藝國にしたが為の其次は阿波の國では都合がわるく無理に吉備の高島宮に擬したものであります。阿波の郡賀郡の橋浦の瀧頭は高島宮ありましてここから対岸紀州の連山ははつきりと見えるのであります。天皇は奈半利の多祈理宮より海岸舟に東行せられて阿波に入られ八坂八決を越えられ東端の蒲生田坪に立たせ玉ふ遙に眼前に髣髴たる紀伊路の連山を望まれてそこが所謂青山四圍の地であるかと御意深く此地に在つて兵船糧食の御準備に

三年を賞され次養であります。如電翁は先年親しく茲に行か津之峯に登つて橋頭の高島を望み

討古南阿津之峯 春寒橋浦一灣風 黄泉久被黄薇誤 誰省千秋高島宮

と一詩を口吟して居ります。一峯にして中州を平定せんとして三年間も兵食の準備に費されるといふ場所としては吉備の國より阿波の高島の方が遙かに好適の地である様に思はれるのであります。此島には昔より清泉湧出して居りました。天皇泊舟の飲料は此水を用ひたものと想像され高島の宮嶽もその辺であらうと翁は申して居ります。剣の珍貴が皇軍を迎へて水先案内に立つた場所も古事記と書紀に違ひありませんが翁は是を紀伊海峡の出来事として居ります。是より北航して由良の頼貞を御通過に存ります。茲は潮流が非常に速い所でありまして翁はこゝを速水門に擬して居ります。翁の説によれば迷岐と云ふ事は潮流存正の急峻なるをいふもので断じて一地の名称でなく此由良海峡は朝夕激激なれば速の名に適へりとして居ります。

其から大阪灣に入り淀川を溯つて青雲の白肩津に上陸し私舎衛放の戦に皇兄五瀬命傷き玉ふ軍を還して紀伊路に回航して進軍せられる所は記紀と大同小異であります。大体之下私は如電翁の御説を御紹介申上げを積りてあります。翁の説は確かに合理的であり妥当であります。然し未だ文献を覆へずだけの根拠はつかんでおれないと思ふ今後郷土史家の研究に依つて更に的確なる根拠の上に立つて翁の説が立證されるならば單り日本建國史の大革命たるのみならず亦土佐歴史の偉大なる新発見となりませう。御駐蹕遊ばされた土佐の地名は由々しき聖蹟として千古に輝くのは勿論、天皇の御軍に従つて日本建國の聖業に健闘した奈半の土佐の健児もあつた事であらうし往來空處を土佐上古史は光榮ある新しい頁を生み出し、



幕末維新の上佐勤王史と首尾一貫した誇りと栄誉に輝く新土佐歴史が依られる故であります。

第二章 横波の植物景観及動物

辻 保 二 郎



第一節 地質概要

横波三里の名勝を扼する浦の内村は東端堂の浦南方海岸東径一三二度二六分西端馬路西方山地東径一三三度一八分北限鷗郷谷東北方山地北緯三三度二八分南限甲特南端北緯三三度二三分に位置する狭長な地域で地質分布を見るに綱付山脈及五領寺山脈の両山脈に於て山脈の走高は併行して中生代の地層が走つてゐる。綱付山脈に於ては明らかには白亜紀下部即ち安藝川層を見、

五領寺山脈下は白亜相上部(鳥の巢層)の発達を見てゐる。之等の地層の接点(押阿、中浦線)では押阿断層谷を形成して、且つ横浪三里の入江は此断層谷たる地溝帯に海浸を見を所謂溺水谷下此の形成は白鳳年間と言はれてゐる。

第二節 気 候

気候に付いては本村に於て特に観測された事実がないので詳言出来ないが他の同緯度の地点よりは遙に温暖で足摺岬及室戸岬の線安藝郡海岸に類似せる気温と思はれ雨量も多し植物の生育には適切であつて、一般に南花時期の如きも高知地方よりも早い様である。

第三節 植 物 区 系

本縣の植物分布区系に就ては高知管林局の調査があるが之に依ると四國島の植物区を五区に分割してアコウ帯、シイ帯、ツガモミ帯、ブナ帯、シラベ帯とし之は亞熱帯より寒帯に至る迄の林相を冠有し極めて複雑である。本村は網付半島の南斜面に於てアコウ、モクダチバナ、タマシタ、ホウロクイチゴ、タイキンゼク、アホザリの天然林等を有し明らかには亞熱帯の林相を示しアコウ帯に属する地域である。同半島北斜面及横浪三里の沿岸海浜地域では普通植物中に多数の亞熱帯植物を混在し漸次他区系へ移接せんとする林相を示し、各越低地谷を内部山地に至つては潤葉樹林の特長ある植物帯を示しシイを主樹としクリ、アラカシ、ヤマビハ、クス、ヒサカキ等繁茂海岸に近くウバメカ

シ、タイミンタチバナ等を見、峯筋近くにはアカマツの発生又少からず。林間の疎開部には、ユシダ、ウラジロ等の羊歯で地表を被ふてゐる景観は正にシイタイの特長を示してゐる。本村の植物区系は以上の如くアコウ帯及シイ帯を分布し且つ海岸植物の生育するあり故は四区系に分布区を区別するを適切と思ふ。即ち南部より内部に向つて

- A. アコウ帯 (亞熱帯植物区) 網付山脈南斜面
- B. 中 性 帯 (アコウ帯とシイ帯との交差区) 網付山脈北斜面及五領寺山脈の一部
- C. 海岸植物帯 (海岸植物区) 海岸に近い地点
- D. シイ帯 (温帯植物区) 其他の地域

(図表 1 参照)

第四節 横浪の植物目録

A. 外海に於て発見せられるもの (吉永先生採取会に於ける)

(1) アコウ *Ficus Wightiana* Wall. クハ科  
 アコオキ、アコウノキ、アコノキ、アコギ、アコ、ミツギ、アコミツギ、オウギノキ、オホギ  
 ボケ、ウスノキ、イハダレ、イソイタバなどの別名があり漢名では赤榕、雀榕、鳥屎榕など当  
 てる。室戸岬方面では其の板が少量の水を含みてゐる為には薪材として用ゐ難きは依り「ミツ  
 キ」と呼ばれ熊野郡では「アコノキ」。「アコギ」などと呼ばれらる。当村及秀郎附近では「イ  
 ハダレ」或は「イソイタバ」と呼ばれてゐる本牧野博士の説に依ると「イソイタバ」と言ふ方  
 が適当で和名の通称「アコウ」よりは優れてゐることである。イソイタバと言ふのは既に

あるイタブの意でイタブセイヌヒハ *Ficus erecta Thunb.* の上佐の方言である。

樹高は約4—5丈に達し葉は平滑にして楕円形をなし長柄を有し縁辺は波状をなして居る。夏に淡紅色のイチジクに似た花を出し小珠状の果実を付ける。枝より気根を出して地中に入り新樹を作る気根の多いものは大きなもので300余小なるものに至つては2000—3000に達するものがある。従来此の木を榕樹だとせられてゐるが今日尚之を榕樹だと言つてゐる人も沢山あるやうである。どうしてアコウを榕樹だと言はれる様になつたかと言ふと昔我が邦未開の時代に學者達が支那の本(南方草本狀、玄東新語、嶺南雜記、榕城隨筆など、いふ本)にある榕樹を見て、アコウを榕樹と感通をしたとの事だアコウは我國では普通に見られぬ珍しい木であり其樹の形状や葉や実の様子生へてゐる具合又気根の出る事等ピンとは合はなけれど榕樹にそつくりだと言ふ所からアコウを榕樹と信ぜられてしまつたのである。此の事は徳川時代を経て明治中期迄続いたのであるが台湾が日本の版圖となつて同島の樹木が採集せられ始めて琉球の植物も研究せられ一面一般植物分類學の研究が進むにつれて榕樹なる樹木の正体が確かに認識せらるやうになつたのでアコウは榕樹でないと言ふことになつたのである。

アコウの學名はヒイクス、ワイチヤナと言はれるが本名の榕樹はヒイクス、レツサ *Retusa* L. と言はれアコウと同じく無花果屬 (*Artocarpus*) のガシマル(琉球の方言)を言ふもの下此の木は常緑で四時葉を青々としており幹は太木となりそれなら葉の縁を気根が垂れ下り地中に入つて新樹を作る有名なバンヤン樹と同様な姿を呈する。元來榕と云ふ字は容れろと言ふ意味を持つてゐる、即ち此の木の下は窠も大層の如く堂宇の縁で其中へ多くの人が容れろ事が出来る又は兩宿りなども出来ると言ふので木屑は容の字を當て、榕と言はれたのであるが、榕は印度、馬來群島、南支那の熱帯地に普通の植物で我國では台湾、琉球によつて延長して産す

るが内地には分布してゐないもので内地人は此の概を知らなかつたので前述のやうにアコウと榕と混合してしまつたのであらう。アコウは此の榕とは別種であるが同じく無花果屬であるので実はイチヂク榕(ガシマル)等と同様なものであるが小さくて殆ど食ふに堪えないことはガシマルと同様である。ガシマルが常緑であるに反してアコウは年に一回落葉する、四月頃新葉が萌出して同時に旧葉が脱落する、其の実は地に落ちると其の処に苗を生ずる、イヌビハの如く雌雄別株であるといふ。支那で榕と云はれる樹木は此の外にもある、印度にある「バイエンツリイ」などは枝が折り気根を出て柱の如くなつて数大隊及の軍隊が入れるので榕と記してゐるが豫密に言へば榕樹の一種と言ふべきもので「ベルガル」方面にある釈迦公其の木の下で説法をしたと傳へられる菩提樹も「インドコムノキ」など榕樹の一種と言ふべきものである。アコウの分布は、印度、ビルマの熱帯地に生じ香港にも見られ(南支那)我國では台湾、琉球日本南地に至つては九州並に四國の西部及南部より九州の西南海岸まで及んでゐる最も顯著な亞熱帯性植物で其の生育区域は生物學上より重要視せられるものであるが、四國では本縣幡豆郡下川口、三寄沿岸、清水町、高岡郡手津岬、弓ノ御中島、中島、神島、久通附近、本村中山半島西部外洋に面したる部面、安藝郡扇根村海岸、室戸岬、桂名、野根村呼路まで達し、徳島縣橋浦、小松島にも生ずる。本村外洋面のアコウは純林状をなし多数繁茂してゐるが往年は此の辺一帶一大自然林をなし頗る珍奇な景觀を呈してゐるものであるが近年ピンズ栽培の盛になり漸次アコウ純林の減少した事は非常に残念である。充分の保護施設を講じ純林を保護し併せてアコウの雌樹よりは、苗木を生じ以長早しとの事であるなら繁殖の方法を講じ外洋斜面に一大アコウ林を造成することが必要であらうと思ふ。

(2) アヲギリ (梧桐) の自然林

*Primiana platyfolia* Schott et Enall アヲギリ科

葉長柄を有し葉身大形で三尖し基部は心臓形をなして居り裏面に毛茸があり裏面主葉脈の分岐  
尖には密腺がある。雌雄異花で同株に着生し五瓣黄緑色の小花を穂状に長く柱頭は綴る。果実  
は管果全く成熟しないうちに裂開して果舟状の兩線の基部に各一二個づつの種子を生ず。  
吉永虎馬先生のお説によると本縣行当岬附近から此の岬端を経て飛鳥に至る海岸に多生し、特  
に飛鳥岬の西部は原性状樹林をなしてある又多ノ御久通観音岬、興津岬海岸、須崎港外半島  
の南方長者(野見湾に面す)新在村角谷岬の南嶺旭安和の海岸にも自然林(自生)と思はれる  
ものがあり之は支那南部、台湾琉球等に於て自生を見、九州にも自生品があるとの事であるが  
此等南方自生地との分布關係上重要なものであると言ふ事であるが本村外洋面海岸甲寄にも自生  
と思はれる梧桐林を今回発見した。

以上成就いての文献に基きるとアヲギリ自生地最初の報告は大正十四年十二月内務省発行  
天然記念物調査報告植物の部(第二輯) 24頁(高知県立愛媛県に於ける植物(調査報告第一  
八号大正九年九月) 史蹟名勝天然記念物調査会調査員吉井義次氏(現東北帝大教授理學博士)  
に依つて報告せられて居り、室戸岬のものに就いて其の自生地を確認してあるが本村  
産のものも同様に自生地として重要なものであると思はれる。

(3) タ イ キ ン ズ ク *Senecio secundaris* Ham 菊科

英領印度より支那南部を経て台湾に分布し尚北進して本縣南部沿海地方に達する菊科植物で本

縣では安藝郡穴内以東に多生し羽根岬から室戸岬を廻つて野根村に至つて最も盛に生育してあ  
ると言はれて居り長大なもので七八尺又それを超へる灌木状の草木で繊細な茎は樹木  
蔓本などに懸つて叢状をなして美しい黄金色の花が枝頭には簇生して冬期は海岸を彩つてある。  
葉片は小さく葉背裏が白い依つてある所もあるやうであるがあまり美しくないと云ふので多く  
は依らないが今では園藝品となつてある。元来日本内地で野生してある所は土佐と紀州だけで  
あるが紀州のものに愛種で土佐のものが正種である。之が土佐に野生してあることは面白いこ  
とで多分照葉地より種子が漂流して来て土佐に着生して野生となつたものであらうとの事であ  
るが本村にも此の菊が外洋面の断崖に多数野生して美觀を呈してある。

此の菊は漢字で准金菊と当てるが之は曾て牧野博士が冬吹くので雪見菊と命名してあるものを  
明治二十六年頃牧野博士の研究に依り黄金色の花が柱高く何千となく咲くといふので准金菊  
と命名せられたが研究の後シセシヲ・スタンデンスであることと本判つたと先年牧野博士が帰郷  
せられた時の遺蹟速記及高知博物館雑誌の第五号に明記されてある。土佐の名物の草本である  
本村に於ける顕著な植物の一つに数へらるべきもので今回の採取会で外海で発見せられたがそ  
の他の地にも相当分布されてゐることと思ふ。

(4) タ マ シ ダ *Koproschlegelia conduplicata* Presl ウラボシ科

地下茎は細長く匍匐して地中の塊茎がある玉の如し。タマシダとはこの塊茎より名付けられる  
。細長い羽状複葉を多数一株に簇生してゐた大きなものは二尺以上に飛進する。葉裏は腎臓形  
の被膜を有する裏葉を生じ暖地山中に自生する。亜熱帯性の羊歯下等木及羊歯蕨類及本村外  
浦以西須崎以西に自生する。内海では全然見かけない様には思はれたが最近馬路部落で発見せら

水たので之は外海岸にのみ生育するのではなく内海方面に分布されてゐると考へて差支なから  
じ。

(4) ホウロクイチゴ *Rubus sieboldii* Blume イバラ科

多年生草本で茎はフユイチゴに似て稍大である地上に平臥して在々所々より根を出す特徴が  
ある葉は革質で常緑葉身は円形で下面に腺毛があり花は前年生じた葉の葉腋に着生花後花殻果  
実を結ぶ、タグリイチゴ、オニイチゴとも言はれるのでタマシダと同一分布をなす。亜熱帯性  
の草本である。

(5) シタキサウ *Stephanotis japonica* Makino

「ホウロクイチゴ」など同一分布系統に属する亜熱帯の植物で珍らしいものである。  
、五台山にも見られる。

(6) エダチニンドウ *Leonice ryhoglaea* Miquel 忍冬科

亜熱帯性の植物で藤多那及須壽以西に多生し甲斐から東には全く見られない珍らしい植物であ  
る。

(8) イソマツ *Stelice arbuscula* イソマツ科

南瀬海岸に自生の多年生宿根草本で茎高四五寸下部は木質をなし葉は上部に叢生長卵形全辺夏  
日葉向より花茎を抽出梢上多く分岐し五裂小形白花合弁花を着生す。

(9) ハマボツス

此の二つの草本は外海、海岸の下部若上に着生群落をなして生育しており更に外海より岩礁風  
の海岸にはオニヤブソテツを生ず、オニヤブソテツは外海海岸斜面頂上に至るまで岩削の所に  
多く自生してゐる。  
B. 外海及内海(鵜無神社附近舟越山)に常見するもの  
ハマヒサカキ *Erigeron marginatus* Makino 山茶科

暖地の海岸に自生する亜熱帯性の植物でや、「ヒサカキ」に似てゐるが一般に「ヒサカキ」よ  
りも小さく常緑の灌木で葉は革質倒卵形をなし切縁に金毛鋸齒葉を有し花を二三箇づ、腋生す  
るびさかきよりも小さい花である花期春日花白色果実は円く紫黒色をなす

(2) イヌビハ *Micis erecta* Spurr. クハ科

俗言「イタブ」といふは之で別名を「コイチジク」と言はれ漢字は天仙果と當る。暖國の海  
岸に多生する常緑の灌木で幹高一丈餘に達するも本村では舟越山麓より頂上即ち山脈の峯に向  
つて段々少くなり外海にも自生してゐる。樹高は四五尺——六尺位のもので一般に矮小であ  
る。葉は楕円形をなし互生して殆ど平滑である夏秋の候葉向に長梗を出して單性花をつけ花托  
内にかくれること「イチジク」の如く「イチジク」よりは稍小さい。「イヌビハ」は本縣海岸  
地方には多く小児之花を取りて食ふ。アコウと同属である。

(3) メジロホホヅメ *Solanum lycium* Lour. ナス科

四国、九州、琉球に自生する草本、亜熱帯性、葉は卵状楕円形又は卵状長楕円形で鋭尖頭葉柄

を有し夏日白色五裂の合弁花をつけ後球形の扁平の果実成熟する。本村では「イヌビハ」の如く分布する。

(4) ヒメエヅリハ *Daphniphyllum glaucescens* タカトウダイ科

これは本村では舟越山山麓より峯に至り更に外海に分布し甲斐先端まで多生してゐるもので亜熱帯性の珍らしい植物である。

(5) ヤマイバラ *Rosa moschata mill* イバラ科

(6) フヂツツジ *Rhododendron tosaense Makino* シマクナゲ科

此のツツジは土佐独特のツツジに数へられるもので「フヂツツジ」は牧野博士が藤の花の咲く頃咲いてゐる所を発見したので「フヂツツジ」と命名せられ学名をロードデンドロン・トサエンスとせられ水佐のツツジと云ふことを公にせられてゐるが本県の方言では「メンツツジ」と呼ぶ別名「オンツツジ」 *Rhododendron sibiricum Makino* があるので「メンツツジ」の方が却つて良いと言はれたとの因縁話があるツツジで幡多郡及土佐の南部に多生しており土佐の中部以北には見えぬ亜熱帯の植物で愛媛縣より安藝の宮島から中国地方に分布してゐることと判明してゐる。本村では例に依つて舟越山の北面山麓よりして峯に及び更に外海々岸に亘くオンツツジと共に分布してゐるものである。

C. 鴨無神社境内山地及舟越山北面山麓のもの

全 上

(1) 鴨無神社境内のソテツ雌株

ソテツ *Cycas revoluta Thunb.* は本縣に於ては各所に培養せられてゐる。樹木でまゝで珍らしいとは言へないものであるが元来雌雄別株であるが雌株は本縣では非常に珍らしく高知市附近などでは全く見られなれぬとの事と今岡の採取で吉永先生はわざ／＼此処の雌株を採取されて行つた。此の雌株は鴨無神社境内の社頭西側に二個ある。珍重なものであるが本村では畑部部落馬路部落立目部落にも巨大な雌株を栽植してゐるのは真に珍らしい事である。此のソテツの雌株は植物学上極めて珍奇な現象がある事で貴重且つ珍奇な樹種である。それは明治廿九年に池野俊一博士が小石川植物園で当時同園に働いてゐた里家の故平瀬平五郎氏と共にふとしを機会から学問の謎とせられてゐる奇態な顕花植物花中にある活動物の存在せる事を発見し所究の若果精虫と卵子であつて動物と同様受精によつて生殖するといふ一大発見が水入水によつて顕花植物と陰花植物との関係が明らかとなり随つて植物進化の行程が初めて明らかとせられたものである。此の精虫・卵子はソテツ及びイテフに於て発見せられたものである。池野博士は日本学士院名誉会員で我國植物学界の耆宿である。

(2) トバラ *Pittosporum tobira Sieb*

(3) ヤマモガシ *Heliconia caribbeensis Lour* ヤマモガシ科

帯線香本、長楕円形又は長剣形にして先端尖り縁辺に疎な鋭鋸齒を有する葉を互生す。花白

黄色の小形花被を梢上の葉腋に穂状花序をもつて排列す暖地性

(4) ツゲモク

*Stex lanceana Maxim*

暖帯産の植物ではあるがむしろ寒い所に産するもので本郷では珍らしい植物で幡豆郡の黒尊山に産する外あまり類例を見ないものである。

(5) カンザブライウキ

*Symplocos theophrastifolia Sieb et Zucc*

暖地に自生する常緑喬木で幹高三丈余長楕円形單頂で縁辺に鋸葉を有する。葉は短柄を有し幹に互生す。夏日白色小形の合弁花を穂状花序に排列し小球状の核果を生ず。

(6) オホカグマ

*Woodwardia japonica Dur*

ウラボシ科

亜熱帯性に近い羊歯で幡豆郡では多生し須崎及高知市外の円行寺に於ても見られる。コモナシタに似てそれよりもはるかに大形のもの下コモナシタと同様に葉上は新幼芽を生ず。

(7) ナギラン

*Gymbidium laneyolium*

ラン科

土佐寒蘭や青蘭などによく似た蘭で此のあたりでは珍奇な植物である。雑木林の下草の間にかなり多数発見せられる。

(8) シマエンジシ

*Cladostis takirioi yatabe*

マメ科

*Maclebica Takirioi Makino*

海岸に生ずる亜熱帯性の灌木でイヌエンジシに似てあるがイヌエンジシよりも小葉は精小さく鋭脚で毛茸少く葉弁は全辺である。明治二十五年十月十日植物学雑誌第六卷第六十八号で理学博士矢田部良吉氏のシマエンジシ *Cladostis Takirioi yatabe* の学名の新種として発表せられたもの下 *is New or little known plants of Japan, No. 9* があり其の記載は田代安之氏が奄美大島に於て一八八七年九月に採取したるものを東京帝國大学小石川植物園に栽植せられたるものに基いたものである。

九州琉球に分布する植物であるが本郷では二三年前室戸岬に於て吉永虎馬先生に依つて発見せられた昭和十年此の地を之の植物の分布の北限地として認められるに至つた。之は四國に於てのシマエンジシの最初の発見に係るものであるが本村に於ける本種の発見は四國第二の産地と言ひ得るわけである。本村に於ける最初の発見は本年六月十二日の採取会に於て東分字鷗無の舟越山北面山麓の海岸であるが樹高も割合に低く分布も小範圍に止まつてゐてこゝにもシマエンジシを認めると云ふ程度であつたが浦の内郵便局長田中茂氏のお話では灣内一円に亘り見られるとの事だ其の後調査したる灣内一円に相当分布されて居り樹高並に分布範圍の相当大なる箇所も他に多くあり。この分布が果して自生品であるか否かについては學者の裁断に待つとして目下本村北限と認められるのは立目であるが出現、盛岡、坂方にも分布されて居ると思はれる。随つて現在北限地と認められてゐる室戸岬より本村は遙かに緯度が高いので本村を以てシマエンジシ分布の北限と認められるべきものと思料する。本村の分布は就て詳説せんとす。

本村に於けるシマエンジシの分布地

奥浦東分

鷗無

舟越山北面山麓の海岸

西分

坂内

浦 東分 中 浦  
 浦 内 種 横 浦  
 立 種 木 西 海 岸  
 須 浦 目

其の他出見塩岡天方福浦等分布せりと思はれらるる未調査である。  
 分布地に於ける景観

共通な特長・何れの分布地域を換するも該樹は堤防又は堤防状をなせる土圃に限られてお  
 るもの、如く山麓又は山地の切取面雜草多き原野砂地等には之を見ない。堤防に於ても海  
 に面せる海岸面の石垣様の斜面には比較的少く内側斜面に樹数多く群落をなしてゐる。又  
 斜面の内側即ち海面に面せざる方に於ても接續地が乾地である場合には殆ど樹種を呈す稀に  
 見らるる極めて少く且つ矮小であるが水溜又は頭地である場合は群落の範圍も広く且つ樹勢  
 も良好である。尚斜面に雜草類の繁茂せる場所と乾地不雜草の多くない域とでは雜草の多  
 い所の樹勢が強く又雜草地では分布が点生的で群落をなしてゐないが又スサケ、チガヤ、  
 イタドリ等の繁茂せる所附近にヨシ、アシ類の多き所では群落を為してゐる。  
 更にアカメガシハ、ドヨウフヂ、クサギ、フヂ、ヌルデ、ウツギ、ネコマナギ、イヌザンシ  
 等の小差木の繁茂せる所には樹勢衰きものがなき群落をなしてそれ等の樹木の間に繁茂して  
 居る様である。

第五節 學問上の特殊な植物に就いて

ハマサジ葉上の銹菌

*Blattaria japonica* S. et N. に寄生する *Uromyces limonii* (O.C.)  
 による。

最初の発見は松山附近伊予國栗井村に於て明治廿六年(一九〇三)六月與平幹一氏に依り採  
 取せられた。之は平塚内四國植物銹菌誌(鳥取縣鳥取高校理科學會報告書に在り)に依り発表  
 され又本種に關して北海道帝國大學農學部教授中藤誠哉博士は其の著 *Uromyces of*  
*Japan* (1922)中に附記發表されてゐる。標品は同大學に保存されてゐる本村鶴海海岸に  
 て発見せられたるのを全國第一番目の発見である。

ハンゲシマウ (*Saururus Laurencei* (Desme) に寄生する銹菌)

此の菌は吉永虎馬先生が明治廿四年に本村沼山岡(堂の浦南の本郷谷)——宇佐として発表  
 されて居るかも知れないが本村の漢りであるから此處に訂正す——に於て世界最初の発見を  
 せられた本村に取つて因縁ある貴重な銹菌である。之は勿論學問上の問題で実生活や普通の  
 植物では我々とあまり關係の無いものである。其の價値少きものかも知れないが銹菌研究上最初  
 の発見に係るものは學問的には重要なものである。本村に於て最初の発見に關する此の菌の  
 記載文を上げる。

ハンゲシマウ (*Saururus Laurencei* (Desme) 葉上に寄生する銹菌最初の記載文  
*Uromyces Saururi* P. Henr. n. sp. ; *Maculis* .  
*subrotundatis, gaeorgiis, atrorubris, minutis; aciculis hypha-*  
*phyllis sparsis punctiformibus, cupulatis, aciculisporis subg-*  
*lobatis, 15—25 X 15—20 M, hyalino-fusciculis; soris tele-*



*nitospiriferis, apice folius minus incrassatis, obtusis vel  
 applanatis 20—28x15—22M, episporio lumen, leri, Red-  
 icello leri lanato, lumen-neolo 10x5—6M Jata, lumen-  
 gamu - 2 leri aug. Blä Stern von samurus louniri 20 leri  
 Yaskinaga aug. 1901 No. 50 又は Heaburgie 誌第四十一卷  
 1902) 又は p. Hennings の, Geinige neue japanische  
 Medicinen III に記載されたものである。*

第六節 本村産有用植物に就ての概要

有用植物の範囲は頗る広大である。

建築用材

細工物用材

薪炭用材

根菜類 ———— 各種の園藝品野菜類等

果樹

藥用植物

等各種各様で其の大半は枚挙に遑なきものである。茲には本村に於て特殊を生産品として注目せらるべきもの又は産額多きものについて概説せんとするものである。産額分布の状態につき其の詳細は産業地理の方面に属するの故には省略し各種の品種特長等に就きて略説せんとする。

ものである。

(1) ビーナス

普通にはビーナス又はピースと称せられるもので、豆科のエンドウに属する各品種であるが本村に産するものは所謂グリーンピースと称へられるもの即ち青エンドウとは異なるものである。栽培地は主として南部半島の南斜面即ち太平洋に面する急斜面を耕地として開墾した土地及立目及その他の傾斜の急な日光のよく直射する箇所は栽培せられる。殊に半島南斜面は産額特に多くビーナスの收納後はサツマイモを栽培し此の方面でも相当の成績を挙げてゐる。此のエンドウの品種は二三口止まらざればは謂へるには白井エンドウと称せられる品種下高梨ビーナス又は北海道ビーナスとも言はれるものである。

(2) 柑橘類

立目を中心として各部落に近年頗る発達した果樹は柑橘類で農家は十万余本、五ヶ年計画など樹立してゐるやうであるが本村産の主なる柑橘について其の品種について列挙すれば  
 小夏(ニウサンマールオレンジ)、温州、ネーブル、夏橙(サンマールオレンジ)、ポンカン、船床(サンマールオレンジ)、レモン、文旦、紅柑、皮壽、地密柑、キ又子、橙、ドロ温州(オウトウ)、甘密柑、パレンシア、金柑(長丸)、フシカン、直七、三笠柑、クネンボウ、地密柑等種類多し。

(3) 草

中浦東介其他の部落に於て近年栽培を始めて好成績を収めてゐる。品種は米國種、ブラインド、エルローにて收斂せられた煙草葉は主として兩切煙草用に使はれバット、左リ、エヤーシツ石、ホー石、裝束の原料となる。

(4) 桑

切畑、馬路、大浦、中浦を主として全村至る所に養蚕を営むのでクハは本村主要の植物下桑畑は又至る所に分布されてゐる。又品種も相当多きを想像されるが、養蚕業が即ち及迄倉岡会社によつて統一されてゐる關係下品種も改良され養蚕に適した品種を栽培されてゐる。

(5) 羊 齒 類

近年山中に自生する羊齒の採取する者増加し相當の値段で取引されてゐるが之の種類は極めて少く自生する羊齒に至つては百數種を下らないが採取の目的に於ける種は極めて僅少である。即ちゴシダ及びウラジロ及びウラボシの數種に限られてゐる。

(6) 西 瓜

大和西瓜及銀西瓜等相當産額もあり一時浦ノ内西瓜の名を得たが最近はやゝビーストに押されて味味がある。

(7) 湯 漚

味の良きものを産するが須賀戸波方面に移出せられるのみで中央に於ては未だ其の價値は知られて居ないので残念である。

(8) 其の他の植物

栗、シイ、等の樹種は至る所に分布せられ栗の如きは其の品種もニミに止らない種であり、又ウメ、梨、桃、イクリ、ボタンキヨウ等の果樹を栽培するものも受けられど園藝品として市場に出づる量の如きは殆ど見るべきもの無きに付故には詳説する事を止めらる。

第七節 本村の名木

一 花山院の橋

本村出見部落の出見神社は花山院即ち花山天皇御事跡地として知り居り其の境内には右近の桜右近の橋の古事には飯橋を植へてあるが本村としては珍木として数へるべく本縣内でも橋のあるは相当珍奇なものである。

二 綱 掛 の 松

立目部落の東出見部落との間に綱掛寺と云ふ地あり其の坪に老松ありて岸より海に向つて埤水大勢が殆ど潮に洗はれる手ではなつてゐる。之の松を綱掛の松と称し或る年鵜無神社へ御幸の御座船が風雨に合ひ此の松に綱を掛けて難をまけられたとの傳説のある名木である。

三 鵜無神社の雌ソテツ

之に就いては別項ソテツの項で述べたから畧する。

第八節 横浪三里附近の動物

動物に就いての研究は未定或とすべきであるが大體を纏めるに止められた。

本村横浪三里は魚類介類の種類豊富で深浦、池ノ瀬は漁業組合を設立して湾内外の魚介類を收穫してゐる。

魚 類

内海魚としては、チヌ、ボラ、コノシロ等鰈魚としてはガシラ、ハラカタ、ヒダリマキ、コウロ、クロタヒ等を産し、イカ類、タコ類、カニ類の産出も又大である。之等の事はついで目下並に學問的に正確な報告を待たない。名称なども多くは方言を用ひた事はまこと

とは不満の至りである。識者の訂正を乞ふ次第である。(以下同じ)

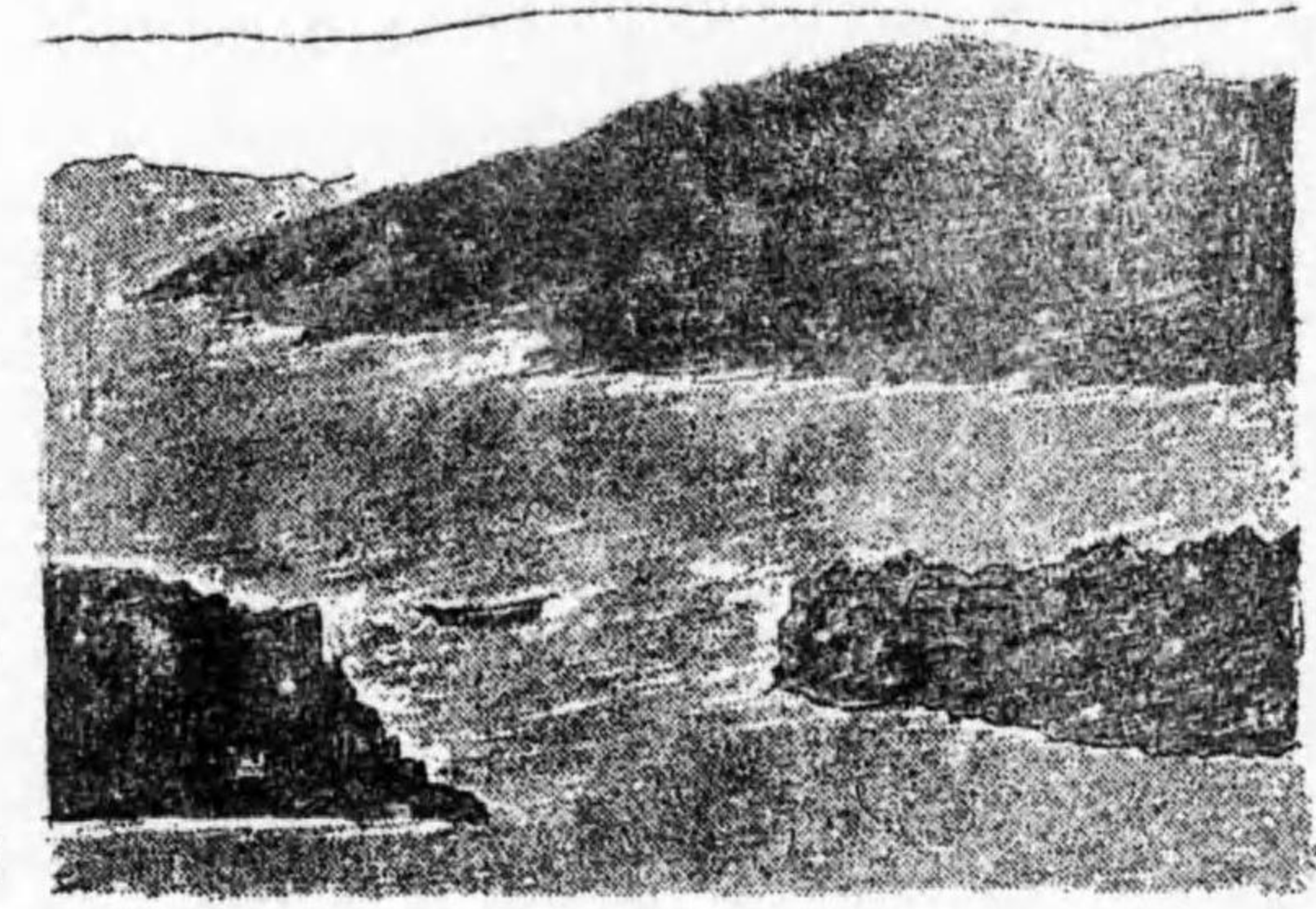
介類  
賜足類、斧足類に分類すべきであるが其の余悉く然いので現在までには調査し互貝類の名のみ上げる。

ハマナリ、ベツコウニシキ、サルボウ、ハラコ、カリガネエガヒ、クジマクガヒ、ヒオオギ(長太郎貝)、オキシジミ、アサリ、スガヒ、バカガヒ、ヒメクボガヒ、ハナマルエキ、ガンセキボラ、ホラノカイ、サザエ、タイラゲ、タガヤサンミナシ、カニモリガヒ、ウミギク(サル貝)、アハビ等でヒオオギ及ウミギクは美味で阪神方面へも移出されてある。

アコマ貝(真珠貝)は本村ノクソに真珠養殖場をまつて真珠の養殖を行ふ年々号類の收益を擧げてある。現在は四國銀行の経営  
フランケトン

浮遊生物は、横波三里海面には到る所に浮遊して居り其の種類も極めて多く、日本産のフランクトンの殆ど大部分は発見せられる。殊に夜光虫、ヒカリ藻の生産は多数で暗夜海上に於ては白銀の光を放つて甚く美飛で更に壯麗筆舌に盡し難いものがある。

### 第三章 横浪の地質及地形の概観



植田素

#### 第一節 郷土の位置及概観

本郷の畧中央にありて南部地域に位置す。

郷土は守佐、高石の一部、波介、中波、吾来、多ノ郷に圍繞せられ水横波三里の風光絶佳の入江を相き外海は唯に絶壁海に迫りて煙波果なき太平洋の怒濤は岸を噛んで風光亦贊するに足る。此の位置を概観するも

東端 ——— カヤグロ鼻 ——— 東經一三三度二五分三七秒一  
 西端 ——— 佈坂北三〇一米の高地 ——— 東經一三三度一九分三四秒三  
 南端 ——— 甲寺の南端 ——— 北緯三三度二三分二〇秒一  
 北端 ——— 出見鴻御谷の北方二三一、六米の高地 ——— 北緯三三度二七分四八秒  
 横浜三里は二〇個の湧を有し湧頭には水田ありて聚落悉達し南側はピースの裁岩北側は赤果樹  
 ピースの栽培に適す。郷社鴻無神社の鎮座するあり或等の史実を傳ふる二十和竟たり。

第二節 土佐の地質及地形

エドモンドナウマンが初めて日本群島がアルプスと同じ帯状の構造を有する褶曲線であるといふ説を立てた根拠は四國の地質調査により得られた所が多かつた。この構造は東西に延長した、本島を縦走する地質時代の異つた岩層の排列にあらはれてゐる。

四國島の地質構造は東面に縦走する排列に依つて北より順に帯状構造の第一帯、第二帯、第三帯に区分する事が出来るが其の中主要なる本地方に關係ある地帯のみについて記述する。

(1) 四國山脈

四國山脈は中央線以南の四國全体に蟠居し地質及地形共に南日本外帯の特徴をよく表はしてゐる。

人 地 質

地質について特に注意すべきは従来南半部を占めて居る、白堊層が江原光生に依つて侏羅層と訂正された事である。白堊層は守和島松元街道に於て奈良砂岩にイノセラム

スの化石を發見し且つ此の附近は白堊下部と見てゐる鳥ノ嶽石灰岩が發見せられた事である。又白石川に於てトリゴニア砂岩嶺石層鳥ノ嶽石灰岩を發見しトリゴニア砂岩を白堊中部嶺石層をウイールデン、鳥ノ嶽石灰岩を下部白堊としたのであつた。中村方面のイノセラムスエノニアンとし又此の附近は鳥ノ嶽石灰岩に相当するものを得た事によつて四國南西端の半島部即ち四万十川流域全体を白堊層と考へてゐる。初め佐川町の鳥ノ嶽石灰岩はノイマイヤによつて侏羅紀とされたのであつたが嶺石層と密接な關係にあつたから其伯鳥ノ嶽石灰岩をも白堊層の最下部と考へるべきである。横山博士は嶺石層を以てネオコミエンの全部であるとしたが鳥ノ嶽石灰岩を之から全部分離することを出來なかつた。又一説には物部川で嶺石層と鳥ノ嶽石灰岩との間に不整合を認められたが共に白堊の下部と考へた。然るに江原博士は物部川及其以南に於ける鳥ノ嶽石灰岩を上部侏羅紀とし安藝所附近の安藝川層を嶺石層と鳥ノ嶽石灰岩の間に置いた。而して鳥ノ嶽石灰岩と安藝川層とを上部侏羅層とし嶺石層との間に不整合を認められたのである。此の鳥ノ嶽石灰岩と安藝川層を連続して江原博士は四万十川統とした。又阿波土佐南部のトリゴニア砂岩を和泉砂岩と區別してトリゴニア砂岩と嶺石層を含めて物部川統と總称し其の時代を下部白堊となしたものである。横山博士のトリゴニア砂岩を白堊中部和泉砂岩を白堊上部となしたのが此によつて江原博士の下部と相対して正確に時代を確定せられたのである。此の四万十川統は一般に南日本の外帯を形成するものと思はれる。隨つて土佐全体から見れば上部侏羅及下部侏羅とが南部を、白堊系統が北部をかたちづくるものであるといふ事か思考される。又此の山脈を山系となづけられたのはリヒトホルンで支那山脈の連綿であるとなし中國山脈はコンロン山脈であると論じられたけれども大陸に於ける宗

主山系の何れにありなせ之を指しても何れかによつて四國南半の地形及地質は形成され  
てゐるのである。

次に江原博士は四國山脈及四國に少くなくとも大回の地変動あるとされた。此は結昌片  
岩、古生層、中生層、第三紀層は北又北面からの圧迫による褶曲であると考へた。御荷  
鉾前、石炭紀前下部三疊紀終、侏羅紀終、下部白垩紀終上部白垩紀終の六回は北方からの  
造山力を受け新第三紀の中葉は西方から第四紀の初は北西より圧迫を蒙つたといふ。併  
し上部侏羅紀までは四國は陸地であつた層である。上部侏羅紀に於て、四國の地体本更  
に沈降して島ノ嶺石炭層を沈積して此の海は一度南に退いたが再び深海となつて火山灰  
及放射虫を含む粘土層を沈積した。此れ即ち江原博士の安藝川層である。

侏羅系を終り此方から造山力を受け四万十川流の上は此方の夫れ以前の層が衝上した。  
此時の運動の爲に三疊層と古生層との間は又島ノ嶺層と古生層との間は越知物部川等の  
盆地を依つた。

第三節 土佐湾陥没と各山地形

土佐湾の陥没も此の時である。(此は時代層を附記する)是等の盆地は下部白垩の海に被水な  
が下部白垩紀終に北から圧迫を受け四國に於ては再び多数の盆地を形成した。上部白垩紀には  
大海侵襲つて此等の盆地を淡水させ斯くして和泉砂岩等島層赤土層が沈積した。上部白垩  
紀の終りに北水面からの力によりて大地変動を起して、中央線を成生し、其北側の花崗岩は沈  
下し、南側の四國大半は隆起した。第三紀に入りて四國は長く陸地をなしたるが中新世鮮新世に

南四國の一部は海侵があつた。中新の終りに琉球孤が西方から圧迫した爲に。四國九州は其の  
影響を受け、豊後水道も出来た。第四紀初に北西より大水平圧を受け四國は多数の不平等の地  
塊に分れた。即ち石越山脈の隆起等予灘、播磨灘の沈下は此の時であつて更に土佐湾も此の時  
沈降した。亦大山活動(阿蘇山麓によるらしい)もあつて洪積には多少海も退却して室戸岬一  
手結線には海岸段丘を作つた。此は江原博士の地変動であるが新第三紀層が石越山の高地にの  
み残るなどは四國に於ける当時海侵が局所的であつたかも知れないのである。又構造線も数  
個ある事が見えられたが其れは御土附道を中心として主として此を述べたいと思ふ。今日の地  
形に対しては洪積初の運動が最も大切である。夫より以前の地変動は関係してない。当時幾  
多の地塊に分れた事と思はれるが現在の四國山脈なら見ると全体が壯年の開拓をうけてゐる爲  
に各地塊の境界を追跡する事は困難である。

の 東部山地—是は安藝—観音寺線以東である。と同時に四國の東部翼をなして居る。此の  
地塊は備中台地と共に日本島嶼に對し、放射的配列を示して居る。然し安藝観音寺線は便  
宜上の線である。

更に物部川の上流榎山川より那賀川の上流に至る構造線を以て更に北部山地と南部山地と  
に分せられる。

(2) 北部山地—二疊石炭紀層の剣山々脈が著しいが此の南側は権山脈となり約二十料を  
走りて餘々に高度を減するが最後は五〇〇米以下の榎山川の谷に降る。(土佐に開採あ  
るもののみを述べ)

の 南部山地—物部川上流の構造線以南室戸岬に至る山地。此の山地の特徴は北々西の方  
向の隆起軸を有する事である。一般の方向に並直に断る隆起が起り又逆に土佐湾及紀伊

水道流下の為に室戸岬の突岬が依られた。此の間に副山々は土佐湾と紀伊水道との分水道にあつて安藝川、奈半利川、羽根川等のコンセメントの川が平行して土佐湾に排水している。川の間の山稜は規則正しく並走し侏羅及白垩層の走向に依つてゐると思ふ。室戸岬を中心として以前は海岸段立が発達してゐるが以北即ち、紀伊水道はリアス海岸と云つてゐる。

(2) 中部山地—此の西境は須崎小松嶽を以てする。土佐湾流下の為最狭部をなして居る。北縁は一五〇〇—一六〇〇米の石植山脈があり、其より次第に南に低下して高知市の背後では五六百米以下の山地となる。此の地帯を全体として見れば中央線に沿へる石植断層によつて傾斜した形である。一大傾斜地帯であると云つてよい。地質は並より結晶片岩御荷鉾層二疊石灰層の順に配列し、地形は大分是等の走向の影響をうけて居る様に見える。石植山脈は北縁結晶片岩帯中を縦走し、石植山を初め後ヶ森山(一八九七)笹ヶ峯(一八六〇)を含み笹ヶ峯の東より銅山川の縦谷を挟んで二つに分れ一は水波峯に至る断層崖頂をなし他は冠山(一七三二)東光森山(一四八七)大森山等を合んで縦走する。石植山東方の高知平坦面並に龍ヶ森山に於ける一七〇〇—一八〇〇米に至る平坦面は特に注意を引く。縦走山脈の南には吉野川の上流の一部が縦谷をきざむ。又土佐川上流は御荷鉾層の中に東北東の方向の縦谷を刻み其の両側に二縦走山脈がある。中部山地は縦走山地と縦谷が特色である。不規則な断層帯地もある。中部山地は南方高知平野があり、平野上に種々の中生層の丘陵が土佐湾流下の名残を示してゐる。浦、内湾附近は頸口なりアス式を呈する。浦戸湾の附近地形も興味があり一つの潟湖である。

(3) 西部山地—四國の西翼をなし地質は東部及中部山地の連続であつて変化はない。地形は此処では長い縦走山脈が比較約少なく全山地数個の地塊に分れてゐる有様は東部中部山地よりも明瞭に見える事である。並にには結晶片岩より成る地塊が三個あるが本地方にはあまり影響がないから概説する。

1. 石屋山塊—松山平野の南東部は結晶片岩を基盤とし予三紀層におうはれ更に安山岩が噴出する。
2. 松山平野の南西方に接する一千米以下の山地で適當の名を附する事が無難しい。が結晶片岩より成る地塊が數個ある。
3. 肱川以西の出石山地で千米以下の結晶片岩地塊である。

此の南境には大洲八幡決橋道線があつて西端は他田岬となる。以上の結晶片岩山地の南方全体には南北方向の隆起軸を認める。……然し東部山地の如く連続的でない。此の理由は四十万十川西流部に於ける隆起軸に對しての先行性流路を示すからである。隆起軸上には雨留山(一一一二米)高研山(一〇五八米)四十万十川の横谷を起して壁ヶ森(八五七米)南端に近く今ノ山(八六五米)等がある。數個の地塊に分れる。隆起軸の北部を合ふ地塊を笠取山塊と名づける。地質は二疊石灰層を中心にして御荷鉾層、南は侏羅層から成る。雨霧山(一一四六)と笠取山(一五六二)は御荷鉾層と二疊石灰層の境界に当る。二疊石灰層は雨留山侏羅層地帯は高研山にあり。二疊石灰層地帯では東西方向の石灰岩山脈(一三〇〇—一〇〇〇米)を派出し東端は鳥形山(一四六〇米)となり平頂を示し、西端は大野ヶ原となりカルスト地形を見る。

4. 大野山地は笠取山塊の南方千米以下の山地、肱川の上流宇和川に依つて囲まれる。大野

山(七九七米)を中心南方に大羽(七九九)山あり宇和川に甘卯之町の波下盆地あり、山塊は北半二層石炭紀層、南洋は中世層

5. 研御前山地連し崎多地方の中心地塊をなす。上部侏羅層より新御前山(九四七米)長山(九四〇米)等を含む。地塊の西方には白亜層の宇和島波下地域が接してゐる。

6. 堂ヶ森山地—四万十川の曲流部に抱かれる地塊。大体侏羅層から成り堂ヶ森(八五七米)鷹巣山(六五九米)柳ヶ森(六八七米)を含む。

7. 大黒山地—大黒山(二〇六米)は花崗岩より成る。此の中央を占めるから名づける。北部中央には花崗岩、露は北北浦鬼ヶ城山(一一四二米)南方には讓葉ヶ森(一〇六六米)がある。侏羅及白亜層より成る。上部侏羅層地域に於て篠山(一〇六五米)より西走してゐる。大黒山地の南境は中筋川の構造谷をなす。又上部白亜層地域をなす。

8. 貝ヶ森山脈(上部白亜層)南東隅に足摺の小地塊(上部侏羅層及花崗岩)があるが中筋構造谷以南の山塊であるが千米以下の山塊であり貝ヶ森山脈足摺地塊は五百米以下である。

以上は四万十川層にして侏羅系の地塊である。四万十川層に就ては後述するが壯年の地形であるから、地形的証明を与へる事は乏しい。高度の分布及構造谷に注意すればよい。海岸は西部に於ては断層海岸を示し或る部面では断層と波降の合致下である。豊後水道はリヤス式の海岸であり、土佐湾一帯の波降海岸は時期進んで比較的屈曲すくまき海岸線であり一般に海崖を作る。

第四節 御土地方に連繫をもつ諸山脈の走行と其の概観

鷲尾山脈——級山脈以南に於ては古生層の外中生層著しく発達して第三紀層其の近縁を点綴して第四紀層は雑谷若くは海浜の低地原をなしてゐる。連嶺の整然として連亘せる形勢は著大ではない。四國山系の主軸と並走せるものは阿波南部の海部山脈より若くは高地低原より佐川盆地に亘る卑窪帯の南方に連繫する二三の小山脈あるにすぎない。自余の部分では地皮緩曲の層向は概ね主軸と並走するものその地表に於ける山嶺の排列は之と一致せず主として水流浸蝕の方向に任かせて秀峰の幾化をなす。一つの山塊を見做す。即ち崎多宇和の山地、安藝山地の如きものである。鷲尾山脈は高知市附近の南部を東北東—西南西に亘る小立にて瀬戸湾の波降によつて東西の二部に分れ東部は介良山(二〇二米)大森山(一三三)愛宕山(一四三)等下湾に断絶する所は東部の突出部となり湾内玉島等の小島嶼の散在するのを見る。西部はその対側西厚となり土佐、吾川の界に沿つて西に走る。其れ一つの山塊を見做す事が出来る。ウツノ峠(一四四)鷲尾山(三九四)荒倉峠(五五)に連り更に仁渡川に分断せられ不入山脈に連続するを見る。

鷲形山脈——高岡郡の北部に並行せる二条の山脈東北東より西南西に走行する。北を鷲形山脈南を不入山脈とす。本山脈は越知の西方御嶽(六八六)横倉山(一一四八)に始まり西南西に延びて仁渡の支流森川の横谷を越へて鷲形山(一四八六)の秀峰となり遂に冠山を越へて土予國境半が城峯(一四四七)薮野峰(一五八〇)に及ぶ。此の山地は古生層で頂部には石灰岩の厚層を含む。南北両側は急崖にて鷲形山の南側は特に傾斜八〇をなす急断崖を著し分徳川、芳生野川上流越知面川の縦谷を見る。此の急崖は岩骨稜々として特異の山貌を呈する。岬峯の一群がある。其の岩頂は内縁岩にて他の山体を構成する水成岩と其の質を異にする。鷲形山の南に連る一小支脈は不入山に連りて森川と芳生野川との分水嶺との分水

嶺をなして矢筈山(九三四)傾斜六〇となる嶺崖がある。

不入山 脈——鷲形山脈の南に接する並行山脈である。古成層よりなり頂上部には石灰岩の露出を見る。山脈の東部は概して低く四〇〇—七〇〇米に過ぎないけれども西部は稍高峻にて千米を越へる秀峯を見る。此の山脈の東端は高知市南方前速の鷲尾山麓倉峠の丘陵より起り仁淀川の西岸清滝山(五〇一)に至り西南に走つて日下川と新居川(波介川)の分水嶺をなして共に縦谷をなして新居川に於ては排水の良好でない湿田の散在を見、虚空岳山に至る深き縦谷を見る。其の谷頭には三角扇状地等の散在よりして古来の聚落の成因となるべきものを見る。天壽荒倉ウツガ峠附近に於ては多数の石灰岩の露出を見る、殊に地獄谷に於ては特に露出の大なるものあり。此の山脈は大洞山(五〇〇)鍋釜森(四〇八)猫嶽(三〇〇)大平山(四〇〇)等の諸丘陵地帯となり更に隆起して虚空岳山(六六五)勝藤寺に至るがその南側は侏羅系上部の五領寺山脈と侏羅系下部とよりなる。網付山脈があつて其の波降地帯横浪三里の深き入江をなして特異性をもつ波降海岸景となる。郷土である。谷頭の扇状地には聚落の散在を見る。最も人口の多いのは奥浦東分西分の諸聚落である。従て地質図より考察する時は五領寺山脈の南北に於て同時代に(侏羅系上部時代)成生せる波降部面をらんか、即ち波介川の堆積による現世統(礫、砂、土)のものが下である。勝藤の西部は松川の清流南に流れ此の谷に沿ふ南方須野地方より北方佐川盆地に通ずる唯一の連絡路がある、其の最高所斗賀野峠(二六一)下である。松川の溪谷の西側に桑田山(七六四)の秀峯を隆起し此より以西連亘して漸く高く千米内外の高距を保ちて悠然屏障となり鶴松森(一一〇〇)不入山(一三三六)となる。仁淀川の諸支流と新居川、芳生野川、松葉川(四万十川の支流)とを分け此の主峯を不入山(一三三六)とす。山脈は更に西方に延々たるも一たび芳生野川

(芳生野)に於て被覆断層線によりて横断せらるゝも更に西にあらはれて西隅の山岳地帯をなして芥川山(一一二八)烏帽子山(一〇二〇)大越(五六二)となる。不入山脈も亦鷲形山脈と同じく幅甚だ狭く北側別府、長者、尾川、大桐の幾個の深き縦谷に穿たれるけれども南側は甚だ急傾し南東東に於ては70—80をなす。更に新居、半山、上分にては現着な窪地帯(縦谷帯)をなして居る。即ち新居川、新在川、鳥出川(北川支流)等縦谷のある所で此の地帯は新在川の縦谷帯に於て最もあらはれておる。半山杉の川及川口に至る地帯は彎曲せる部分下新在窪地帯と称す、其の成生は本山脈の山麓に於て畧東西の方向に亘る五条の被覆大断層を生じて其の南方の地帯下せしに因るものと推定する時は本郷土も船戸の東布施ヶ坂より起る大断層は大野見北端東川床鍋と川内の中間を東に貫き上分平野に至り、多々御宮ノ川内神田に至る中浦と切畑の背梁を東に貫き学校の南の丘陵の北側に北東に横浪に没し根向坪にあらはれて樺木の中心を立目北側にあらはれ蓋屋坪に没して灰方坂本に再びあらはれ入坂入坂の最代部を宇佐野中心に出不新居池浦に消滅するものであるが新在窪地帯成生と浦ノ内湾(横浪三里)成生は同様縦谷帯に相当するものであつて此の傾度は三〇度—八〇度である。更に高岡南方横瀬山(二九七)は六五度の傾斜をなして西方灰方宮川田の頂上に於ては六五度と同一傾斜を見せ出向塩間の頂上に於ては六〇度の傾斜を見せて戸波沢井では聚落の中央を西走し南斜は六〇—四〇の傾斜し太郎丸の南方では八〇度に北斜して急斜し南側は七〇—八〇—七〇の傾斜と畧東西の走行をなして戸波浦に傾き船川、市野々の南方約二料の所の南南側を八〇—六〇の傾斜をなして山形の如き山形をなして、真等の南方に於て消滅し此の中間神田北方の縦谷を備故に至る断層線あり、此よりして見るときは略観察を難からしめ



六 五領寺山脈——上山川（上流は松葉川）及越知面川以南より不入山脈以南の懸谷は概ね安藝川層及四万十川層をなす。休羅原よりなり此の二川は其の上流屈曲甚だしき峽谷をなして居る。水は下流沿岸は横谷をなしてある。水はどしどし稍開けて現世層の堆積地帯を多く見て新地層を有する帯である。此の地域の東部即ち上山川以東では北方不入山脈に近く之に並行して南方土佐海岸を走る。五領寺山脈網付山脈東部より西微南に走り南方は火打山脈形をなして畧北より南に連りて上山川と土佐海に注ぐ諸細流の分水嶺をなす。本山脈は不入山脈東部の南に隣接し不入山脈に比して遙かに低く丘陵の連続に過ぎない。即ち松川の東に起り佛坂の被覆断層線を至て東走し横瀬山（二九七）を主峰として北にも長大な被覆断層線を主軸として北斜面は新居川の流路を含む。戸波北原渡介高岡の緩谷の現世層の丘陵列をなして北涯をなし、茶白山、馬越山、五領寺山（二三二）を連繫して以て浦ノ内湾の北涯をなして波降海岸をなす。本地帯は緩急の小支流を形成して代表的海岸景観を表はす。東は仁波川によって見事なる横谷を表はし丘陵列をなして高森（西畑一四四）大谷山（一一六）秋山の南方を至て甲斐菜切りに至りて其の終りを是す。更に研究すべきは甲斐在吉神社境内の波痕の特異なる景観を見るのには以て面白きものなりと思推す。取岡平野以東長浜川の流路に沿ひて桂浜巖頭に至る間は鷲尾山脈の南側なるを以て其の間は諸丘陵群の並立を見る。然して此等の諸丘陵及山脈は鷲尾山脈と並行するもので松川の西端より寺ノ郷上分の北涯新在川の上流緩谷を過ぎて半山村の南辺に至りて床鍋の被覆断層線を見此処にて其の傾斜六〇―七〇の東部東の走向を有して大野見下る川傾斜七〇―八〇。新中川の緩谷は兩岸迄亘れて特異なる溪谷景をなす。大股萩中（松葉川上流）を至て此処でも河岸緩丘と思はる。旭城をなして四万川の断層線に至て大野見、東津野、松葉川等の三角点の森（一〇五四）へ松葉川上流の

西方）に至る。此の面は六〇度傾斜東西の走行を有して南面は現世正しき脊梁をなす。横原村角点山（九五六）に至る。

六 網付山脈（網付山脈？）

五領寺山脈の南涯浦ノ内湾を限り太平洋岸に屹立絶壁をなす。或は暗礁となり緩急の好景観を呈する。海岸景をなす殊に其の半島中央部甲等を中央として東西に亘る波降景域西に延びて神島、中島の諸島を浮現し野見湾を抱く野見半島となり海産寺山（ ）を西端として急峻は須崎湾の陥没湾となる。海上沖の礁等々現世の出現は考察の資料である。更に東部地帯を占むる北側浦ノ内湾は小半島突出し現世暗礁ありて外景と同（景域をなし緩急小支谷現出して曲浦三聖の入江をなす。此の山脈は丘陵性のもの。東は浦ノ内湾口宇佐野の竜山（三一〇）に始まり丘陵状半島（中山半島）と西にのびて安谷山（三〇七）法印山（三〇一）となり一たび野見湾及須崎湾の波降湾に断絶して更に西に連る巨谷山に現はれ波降峠（二三八）久礼の北涯をなして網付山（八七七）に至りて最も高く松葉川の東岸に終るもの下あり。

七 火打山脈——網付山の南方久礼坂峠（七五七）三子峠（四三四）添地別坂（二七二）附近に

始まり和田川（久礼）と東流する諸細流の分水嶺をなし四百―六百の高差を保ち南々東に蜿蜒して火打山（六〇七）四道坂峠（三九六）入道山（四五七）となり湾曲して西南に向ふ松尾寺坂（三三三）を至て五在竹森（六八五）となり暫く東北東の佈が森（六八八）に達するものなり。此の山脈は土佐海に何つて凸隆せる孤状をなし外側面の傾斜は急にして各所に急峻なる断層崖をなす。現世暗礁となり久礼湾頭の現世上の如江湾頭の現世等を現はれ久礼上ノ加江の黒巻を越く。内側面は所謂尾坂下所謂高南台地（盆地？）を抱き（窪川、東又

仁井田等シ久松、志和、上ノ加江等より此の台地に入るには急峻をのぼりつくして既に各礫の散在を見る。松葉川の流路及浸蝕谷も又驚ある諸向懸である。

### 第五節 土佐湾の海岸形

南に開く大半内海をなして東は崖戸崎より西は腰蛇岬に至る迄四〇〇米で仁達川の西方萩岬を中心として東西の景城を異にする以東は出入屈曲極めて少なく、浦ノ湾以外は湾入に乏しいが沿岸に砂浜地帯連続して海成段丘は奈半利以東に顕著に見られるものがある。西方は小屈曲多山嶽直ちに海に逼つて全々急崖をなし一〇〇二〇〇米の高度を示す。萩崎の西方宇佐湾より凹入する事十一米水深甚だ小である。香山の半島湾の南に斗出して附近に急進する地層の層軸の方向を逐いて畧西より東に延びて東端を意州とす。宇佐湾は此の半島と本陸との間深く東より西に湾入せりアス式海岸をなして居る。西には野見湾の玄洞下湾岸小出入に富み、神島、戸島、中島の三島を包へて幾奇湾は北に凹入し南北方向の陥没線を示す。阿波深く、須崎より海岸線は南に近づく事津岬に至つて南面に向ひ相田岬に至る。但し奥津は浦分と御分とが連繫島であつて其の西に小室の決の音松白砂がみつて砂浜としては実に著名である。此の間二〇〇米内外の高度を示しつゝ山嶽海に沿つて聳へ、良港少なく屈折多く暗礁現礁の多く見ゆるは断層崖の名残であらう。久松、上ノ加江、与津、依賀、下田の小波泊地がある。入野、下ノ加江にも砂浜地帯を見る。

### 第六節 御土を占むる安藝川層

本層は南四國を占むるもので鳥ノ巢層と共に侏羅紀層の重要なものである。侏羅紀の終りに横圧力は北から四國をおしたるらしく其は終侏羅紀時代に中國を押し運動である。この運動は四万十川層に褶曲を生じしめ海上に隆起せしめたる。虚里山層の南方に於て広大なる地塊を占め砂岩頁岩を主とした部分により放散虫頁岩石灰岩を挾有する厚き岩層にして上下の二部層に分れる。本層と鳥ノ巢層との関係は各分布区域を異にする為確然と判断する事出来なないけれども兼田山佛像(斗賀野南方)に於ける上部層(石灰岩を挟み頁岩に富むる砂岩頁岩層)中の石灰岩は鳥ノ巢石灰岩に類似するを以て上部層を鳥ノ巢層と同位のものとして認定すると安藝川層は侏羅系に層するものと見る事が出来よう。本層は江原博士に依り命名されるものであるが地質調査所の鈴木達夫博士は此の層を上部下部の二部に分けたのである。

下部層(南岸の一帶と此岸の一部を占むる地帯)  
放散虫頁岩(放散虫の化石を含むる頁岩)を挾める砂岩頁岩層で所に依つて珪板岩礫岩、礫岩、石灰岩を含むのである。珪板岩や放散虫頁岩中には多くの放散虫の化石を含む下層で之を研究せられたる江原博士によつて北米太平洋岸のカリホルニアのフランシスヤン層(*Franciscan group*) (侏羅紀)中のものと大変よく似て居る侏羅紀のものだとされて居る。

(1) 石灰岩は白色を呈し塊状の部分と縞状の部分とあり縞状の部分に珪質を帯ぶ。本層は下部層には稀有りものにして須崎湾東岸、野井に発見せられたるのみにて厚さ三米内外である。之は以前知られてゐた。之は無化石石灰岩である。本村出身鏡野小学校平田茂留氏は嘗て数年前浦ノ内下中山下海唇類、鮮虫類、*Ammonites* と思はれる貝化石を含む一見鳥ノ巢石灰岩と区別出来ない石灰岩を見たと言つており更に久松町境坂峠西側に於て一工

夫に依て発見され其化石がある。其の化石標品は高知高校地質物学室に置かれておる。セウにまつその不平坦さも親しく之を觀られる相であるが保存が悪く時代及種の決定が不能であるが *Orthis senmurae* の如く思はれると語られる。随つて化石が少なく研究が不憚を感じて居る下部層中より産する中山の石灰岩、久米の貝化石、放射虫頁岩及放射虫板岩の存在は學問的に極めて相当重要なデータである。

(2) 砂岩は上部層のものと同様であるが本層の大部分を占むるのである。然に依て頁岩質の再礫を含む。新しいものは、青味を帯び普通青灰と称して切り出す。上部層に於ては馬路切畑及学校の口の高地新居村八幡宮隣より切出すものと同様であり其の厚さは0.3米—1米—1.5米下頁岩と互層するものが存在し他に灰色又暗灰色を呈するものがある。之等は石英及長石の粗粒より成り粘板岩の小破片を交へる粘土質を以て膠結する放射虫頁岩を挟む砂岩頁岩層であつて

(3) 放射虫頁岩は主として赤色を呈し稀には緑色を呈するが大部分は赤色で赤鉄磁を含む赤色粘土質物より成る放射虫形骸を色落する産物にして粘板岩と称するものは板状に剥離し露頭面に於ては粘土状を現はすものあり、其の厚さ1米—1.5米を普通とし時には10米内外に及ぶものあり、竜の五色決即ち白ノ鼻、高地の中間の露出するものは10米内外に及ぶ土佐石又は板石として呼ばれ硯の材料となるものが多い。此の厚層は西に延びて谷山(二五六)南斜面を下中山、望の浦、鍋島頭に露出す。竜に見ゆるものとの剥離とは異なる。其の他白鷺、大奇、今川内湾頭、福良湾の中央兩岸に二条に平行して露出するを見る。更に須ノ浦南斜面外洋に面する所に5米位の層あり西に延びて馬無神社西方辨取天島の南方の小湾より起りて坂内中ノ浦の境を西に走りて中ノ谷に現はれるものと其の北側に中ノ谷に併行

するもの押阿の鳥坂峠附近に現はれ水約五十度の傾斜をなしてゐる。北岸に於ては立目の中央及ノクソ及灰方寄に1米位の現はれを見る。

(4) 頁岩の前述の放射虫頁岩と異なる点に暗灰色及緑色にして板状と塊状にして質緻密堅硬のもの或は裂理多くして小片に破砕しやすきもので下部層の大部分を占むるのである。故に海岸に於てはよく見る事が出来る。

(5) 下部層の構造について考へるに北方は新居(池ノ浦)、宇佐より灰方の一部産屋より立目に榎木の一部横浪公園より中津をかざる北端の山の中央に至りて多ノ御村をへて東津野村新田に至る。断層を以て安藝川層上部と接し南は久米町より大野見村をへて大正村に亘る一大断層によつて限らる。走向東西南北或は東北東—南西南にして傾斜は30—80度にして尋く地方に傾く所あり。本層は走向断層並に褶曲多きにより反覆露出し地域内には幅なく発達する。

2. 上部層

石灰岩を挟み礫岩を含む砂岩、頁岩層で極く稀に放射虫頁岩を含むものであつて下部層に比して淺海性である。

(1) 石灰岩は三寶山層に接する部分即ち本層の北側に分布して居り鮮虫類海蔭類、珊瑚類等の破片の化石を埋巻し頁岩中に介在せり。佛像に於けるものは鳥ノ巢層の石灰岩に酷似せり。厚さ1米—1.3米にして延長50米に及ぶものが多いが之等の砂岩は灰色又は暗灰色を呈す。

(2) 砂岩は石灰岩に接し灰色及暗灰色を呈し石英及長石より成り灰色粘土質物により膠結せられ水厚さ0.3米より1米毎に頁岩と互層せるものと厚さ5米に達するものがあるが貝化石

石を含むものがあり、時代（堆積の時代）を決定するのには都合がよい。

(3) 頁 岩 ↓ 灰色、暗灰色或は緑色のものあり、下部層のものに比して稍軟脆にして小片に破碎しやすいものが多い。砂岩と互層するものは板状に剥離する普通の三米より、五米砂岩と互層するものは厚さ二〇米に達するものがある。

(4) 放射虫貝岩は赤色を呈し、赤鉄酸を含む粘土質物より成り、中には放射虫を包蔵するものにして厚さ三米内外にして出見の戸波村境に接して唯一個を認む。

(5) 本層は高岡所より戸波、羊山、東津野村に及ぶ東西に亘つて発達するが断層及褶曲多し、為に地層擾亂せるものは厚さに於ては羊山に於て一五〇の米戸波村に於て三〇〇の米に達するもの様である。走向は東西或は東北東—西南西にして北方及南方は四〇—八〇度に傾斜し、褶曲層を形成す。横瀬山（二九七）より戸波、浦ノ内一帯は向斜層を形成する。上部層の地帯の北側は赤川—佛像構造線（断層線）を以て三寶山層（虚空殿山層）に境する。又多の郡神田、中ノ浦、横浪、摺木、塩屋、灰方、坂本、宇佐橋田に至る一線は一つの最乱地帯であつて之で上部層と下部層との境らしく思はれる。

### 第七節 郷土に於ける現世層について

砂礫及粘土より成る沖積層であつて扇状地には粘土層を多く発達す。谷間の扇状地の大なるは奥浦東分西分（大浦、中浦）等なり。

### 第八節 浦ノ内等の海洋海岸（瀨谷）景

海洋海岸は壯年期の景観を呈して居り、平行した谷が流水して形成され、長い入江であつて、穀の下部が泥んで生じた半島（中山半島、網付半島）と安藝川層上部に於ける擾亂した断層によるもので、特性づけられ、日本には稀に見る標式的な海岸形を代表してあり、アス式海岸を全してゐる。之は日向灘の海洋海岸（買田）紀伊の有湯海岸、小陰道温泉津に於ける瀨谷等と類似する点を見、事次出来るが中下も紀伊の有湯とは其の景観等を見るに特に類似した点を多く発見せらる。若も流水した山地の傾斜と谷の密度が小さければアドリヤ海岸に見るカルスト海岸形式に類似して居るかも知れぬ。流水した山地は現在に於ては二百米内外を有する壯年山地（谷山（二五六）横瀬山（二九七）が主峯である。東東北の方向を有してゐる此の下部層と上部層との境界即ち断層の中心となる主谷は瀨谷に於て浦ノ内湾となつたと想ふ。其の長さ約十、一、支谷は小さいが南北兩岸に約二〇個の小湾を形成する。其の入江の大きいものは瀨谷、中浦、須ノ浦、出見であつて宇佐との境界に近い中津半島の兩岸は湾内下は可成り深い入江を形成し、中等などの地帯は流水の形式をよく現はして居るかの視を見る事が出来る。狭小にして最も深いのは瀨谷の入江にして十一尋—十二尋内外を示せる深度なり。湾頭には三角洲平家が發育してゐるから、太い線が山麓線を現はすと入江の原形を窺ふ事が出来、面白く湾形を見る事が出来る。最も深き入江は西分の切畑及東分の戸波浦に至る泉取であらう。其の山麓線以下の海岸は、よくは必ず小面積の水田があり（扇状地）大湾には必ず大きな奥浦東分西分立目出見灰方等の聚落の発達を見ること出来るが中下も中浦横浪（東分、西分）が最大である。外洋に面する部分では海蝕によつて支山稜が甚しく短縮し、海蝕崖は主山稜に迫らうとしてゐる。此の關係は主水界線及副分水界線を点列で記して見ると明白になる。支山稜が北側では大奇半島、赤ヶ奇半島等では二—三軒であるに對し、南側では五〇〇—一〇〇〇米下甲奇、地の鼻

、惟子等寺であつて海蝕崖は甲寺地ノ鼻、惟子等寺に於て特に著しきを見る。幅は北側に於ては五〇〇—一〇〇〇米で南側では五〇〇米以下である。外洋に突出した岬は其の尖端と両側から海蝕をうけて削磨しその前には岩礫、暗礁と細く尖つた海蝕崖とに夾まれて岬となる。甲寺、地ノ鼻、惟子等寺等は此の関係を示してあるものである。尚外洋一帯はあここの自生地帯であり、ピースの敷岩の最も盛んに行はれてある所は海蝕崖上の六〇—七〇度の傾斜を有する地を利用してあるのである。特に外海岸内海岸と殆ど砂浜なく直ちに絶壁を有するの傾向を示してある。内節はさき下急崖ではないが、山麓直ちに波流ぶの景観を呈してある。たゞ此ノ浦は僅かの砂浜上に於ける聚落である。

第九節 土佐灣及浦ノ浦、内瀬寺灣の成因

日本列島は□に鳥取の内側より横圧力を受けて居る。此の圧力には強弱があり強い時は褶曲、断層及陸地の上昇を惹起したりする。四國島では此の力は北々西の方向より加はり長い地質時代には亘り何回となく繰返さるゝ水た水たの土佐の海岸地形を決定し反のは此の中下新生代に入つてから加つたものであると思はれる。

平田君は昭和十年夏江原博士及沢田助手の指導で松山及懸崖沿岸附近の地質研究に行つた事がある。此の地質では四國最古の地層である。結晶片岩層（古生代以前）上に和泉砂岩層（中生代末上部白〇紀）が中央構造線に沿つて衝き上げてあるのがよく見られる。更に此の上に堆積した第三紀中新世の礫岩（新生代）上に再び中央構造線に沿ひ和泉砂岩層が衝上運動を行つてある。此の事實は中生代末乃至第三紀末にかけて少くとも前後二回の横圧力が北々西の方向

から加つた事を物語るものである。此の運動は外□四國にも及んである事は確かでないが高知地方の中生層研究中次の事實は遭遇した。其は物部川□堆積後北々西の圧力に依つて全層中に一〇斜を生ずると共に北側の□□□層との間を構造線に沿ひ火成岩の侵入を見た。此の事實は前述の松山方面に見られた運動と同一のものとして断定することは出来なかつたかも知れないが中生代末頃の運動である事は確かである。更に此の火成岩帯には懸崖、東西に走り北々西の度内外の緩傾斜を示す断層を見るが此の運動は恐らく松山附近で見られたものと同様のものであると思ふ。猶更には此の東西方向の断層を切断する。北西—南東の断層を見るが之は前述のものよりも一層新らしい時代のものである。此の運動は其後現今に至るまで継続され洪積期に入つては安藝郡の海岸に上下二段の海岸段丘を形成してある。以上は依つて新生代に於ける土佐に加つた横圧力の一端を要述し反から以下江原博士の説によつて土佐灣及之に附随する二三の小灣の成因を簡単に述べて此の稿を終り度いと思ふ。

四國の地層は土佐灣に近づくに従つて南に著しいアーチを描いてゐる。之は前述の北々西よりの横圧力に基づくもので此のアーチは南に行くに従つて其の彎曲度を著しくする。之は海に入るに従つて次第に低撓力を減ずるが爲であつて遂には地層が下図の如く放射状又は同心円状に毀れて陥没した。此の陥没地帯には海水が浸入し土佐灣を形成したのであつて、浦ノ浦や瀬寺灣は此の放射状の割れ目の一部であり浦ノ内灣は土佐灣の陥没に伴ふ谷に海水が浸入して出来た入海である。



昭和十二年六月二十五日印刷  
昭和十二年七月二十日発行  
(非賣品)

著作兼発行者  
高知縣高岡郡浦ノ内村  
横浪昇常高等小学校  
長崎 丑馬

印刷所  
高知市公園通り一三二  
高知市職業紹介所

發行所  
高知縣高岡郡浦ノ内村  
横浪昇常高等小学校

終

